

作品研究特講 I		担当教員	かわの ひさとし 河野 久寿
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	1 年次前期	必修

[1] 授業のねらい

個々の音楽作品の成立に関わる社会的かつ文化的背景について考察すると同時に、詳細な作品分析を通して、理論的な見地からの理解を深める。その目的は、我々が生きている実社会と、音楽作品そのものの構造や形式との間に存在する諸問題について多角的にアプローチすることにある。授業はゼミ形式で行われる。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 資料の検索
- 第 2 回 情報の整理
- 第 3 回 曲目解説①～古典派の作品(1)～
- 第 4 回 曲目解説②～古典派の作品(2)～
- 第 5 回 曲目解説③～ロマン派の作品(1)～
- 第 6 回 曲目解説④～ロマン派の作品(2)～
- 第 7 回 楽曲分析と研究内容の文章化①～バロック時代の作品(1)～
- 第 8 回 楽曲分析と研究内容の文章化②～バロック時代の作品(2)～
- 第 9 回 楽曲分析と研究内容の文章化③～印象派の作品(1)～
- 第 10 回 楽曲分析と研究内容の文章化④～印象派の作品(2)～
- 第 11 回 楽曲分析と研究内容の文章化⑤～任意の作品(1)～
- 第 12 回 楽曲分析と研究内容の文章化⑥～任意の作品(2)～
- 第 13 回 楽曲分析と研究内容の文章化⑦～任意の作品(3)～
- 第 14 回 研究発表①
- 第 15 回 研究発表②

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。

研究発表：50 点、レポート：26 点（13 点×2 回）、宿題：24 点（2 点×12 回）、

[4] 教 材

授業担当教員が適宜準備する。

[5] 参考図書

授業担当教員が適宜指示する。

作品研究特講Ⅱ		担当教員	こう ちゃんす 高 昌 帥
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	2 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

作品研究特講Ⅰの背景的理解を基に、作品の音楽的分析をより具体的に試みる。また、楽曲の詳細や様式的特徴を解明しながら、作品の特徴を論じていく。

[2] 授業の計画

授業は下記の内容を中心に進めていく。

- 第 1 回 バロック概論と J.S. バッハその 1
- 第 2 回 J.S. バッハその 2
- 第 3 回 古典派概論とソナタ形式、ハイドン
- 第 4 回 モーツァルト
- 第 5 回 ベートーヴェンその 1
- 第 6 回 ベートーヴェンその 2
- 第 7 回 ロマン派概論、シューベルト
- 第 8 回 ベルリオーズ
- 第 9 回 シューマン、ショパン
- 第 10 回 リスト
- 第 11 回 ワーグナーその 1
- 第 12 回 ワーグナーその 2
- 第 13 回 ブラームス
- 第 14 回 近代音楽
- 第 15 回 現代音楽

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。

レポートによって評価する。

欠席、遅刻、早退は減点の対象とする。

[4] 教 材

授業ごとに担当教員が準備し、配布する。

[5] 参考図書

ルドルフ・ケルターボーン著・竹内ふみ子訳

『ピアノ曲の分析と演奏』（株式会社シンフォニア 1990）

ルドルフ・ケルターボーン著・竹内ふみ子訳

『音楽分析の方法・モーツァルト作品を例として』（株式会社シンフォニア 1985）

楽式研究		担当教員	ながた たかのぶ 永田 孝信
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	1 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

この授業には次の 3 つの目標があります。

1. 西洋音楽における形式（音楽の形）と表現内容とが密接な関係にあることを理解する
2. 音楽の形式的な構成を、調の設定と調の経過の状況に基づいて捉えることを学ぶ
3. 楽譜に頼らず、西洋音楽の構築性を聴取する姿勢を養う

[2] 授業の計画

- 第 1 回 西洋音楽における形式の役割、表現とのかかわり。8 小節の構造と楽段、楽節
- 第 2 回 二部形式と三部形式。緩徐学楽章の形式と歌曲の形式
- 第 3 回 ソナタ主要楽章形式と提示部、展開部、再現部
- 第 4 回 ソナタ形式の提示部のさまざまな形。第 1 主題と第 2 主題の対照性と共通性
- 第 5 回 ソナタ形式の展開部とその役割
- 第 6 回 ソナタ形式の再現部と第 1 主題、第 2 主題。第 1 主題の再現の省略
- 第 7 回 拡大されたソナタ形式 - 主題の増加と移行部・展開部の延長
- 第 8 回 ロンド形式 1 - 大ロンド形式と小ロンド形式。ロンド形式の歌曲
- 第 9 回 ロンド形式 2 - ロンドの楽曲構成の区分 A, B, C における対象性
- 第 10 回 ロンド・ソナタ形式とソナタ形式の類似性と独自性
- 第 11 回 ロンド・ソナタ形式による楽曲の構成パターン
- 第 12 回 協奏曲のソナタ形式
- 第 13 回 ソナタ形式と疾風怒濤的表現。ロマン派におけるソナタ形式とロンド形式の変容
- 第 14 回 対位法的楽曲の形式 カノン、フーガ
- 第 15 回 オルガンフーガと平均律のフーガ。音楽形式のまとめ

[3] 評価の方法

試験期間中の試験またはレポート課題、授業期間中の小レポート課題により評価する。
欠席、遅刻、早退及び授業を妨げる行為は減点の対象とする。

[4] 教 材

ソナチネアルバム第 1 巻

[5] 参考図書

- ハインツ＝クリスティアン・シャーパー著『音楽の表現形式』
中邦彦・永田孝信訳（シンフォニア 2002）
- 石桁眞礼生 著『楽式論』（音楽之友社 1950）
- シュテール著 属 啓成 訳『音楽形式学』（音楽之友社 1954）
- R. ケルターボルン著 竹内ふみ子 訳『ピアノ曲の分析と演奏』（シンフォニア 1990）
- 『吉田秀和 音楽を語る』上・下巻（芸術現代社 1974）
- ロラン・マニユエル著 吉田秀和 訳『音楽の楽しみ III』（白水社 1966）
- レナード・バーンスタイン著 岡野 弁 訳
『バーンスタイン 音楽を語る』（全音楽譜出版社 1972）

[6] その他

授業は原則的に隔週で行い、「授業の計画」の欄に記載した 2 回分ずつ実施します。後期全体の授業予定日は、初回授業時までに掲示でお知らせする予定です。

作曲理論		担当教員	こう 高 ちゃんす 昌 帥
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	2 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

和声学で得た知識を発展的に生かし、試作を通して作曲に必要な基礎的理論とその手法を習得する。最終目標として伴奏付旋律を創作する。

[2] 授業の計画

授業は下記の内容を中心に進めていく。

- 第 1 回 簡単な和音進行に基づく旋律（長調）その 1
- 第 2 回 簡単な和音進行に基づく旋律（長調）その 2
- 第 3 回 簡単な和音進行に基づく旋律（短調）その 1
- 第 4 回 簡単な和音進行に基づく旋律（短調）その 2
- 第 5 回 ドッペルドミナントを含む旋律その 1
- 第 6 回 ドッペルドミナントを含む旋律その 2
- 第 7 回 転調を含む旋律その 1
- 第 8 回 転調を含む旋律その 2
- 第 9 回 三部形式の楽曲その 1
- 第 10 回 三部形式の楽曲その 2
- 第 11 回 リート形式の楽曲その 1
- 第 12 回 リート形式の楽曲その 2
- 第 13 回～第 15 回 最終提出作品制作

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。

毎回の宿題の実施状況（50 点配点）、および最後の提出作品（50 点配点）によって評価する。

[4] 教 材

ソナチネアルバム第 1 巻、ブルグミュラー「25 のやさしい練習曲」の 2 冊を持参すること（出版社は指定しない）

[5] 参考図書

ハインツ＝クリスティアン・シャーパー著／田中邦彦・永田孝信訳

『音楽の表現形式』（柊シンフォニア 2002）

ジークフリート・ボリス著／田中邦彦・永田孝信訳

『和声法 考え方・学び方・解き方』（柊シンフォニア 1999）

[6] その他

随時宿題を課す。宿題の実施状況は平常点として評価されるので、欠席した場合には出席者に宿題を尋ねて授業に臨むこと。

音楽史特講		担当教員	くろさか としあき 黒坂 俊昭
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2単位	1年次通年	選択

[1] 授業のねらい

ヨーロッパ音楽の歴史の中で、1600年頃から1900年頃にかけての音楽こそは、我々のClassical音楽の概念を規定している。その音楽は「調性」といった合理的な音組織によって構築され、同時に個人的主観といった感性的なものによって表現・伝達される。他方、鑑賞者も自らの主観によってそれらを受け止める。ところがこういった優れたヨーロッパ音楽の歴史を概観しようとする時、日本では一般に器楽の考察が中心となり、声楽に関する言及は極めて少ない。そこで、本講義では、1600年頃から1900年頃にかけて展開された「オペラ」に焦点をあて、その本質を探ることを通して、Classical音楽の概念を再考してみたい。

[2] 授業の計画

- 第1回 ヨーロッパ音楽史の流れ
ヨーロッパ音楽史の4段階：単声＋教会旋法、多声＋教会旋法、多声＋調性音楽、多声＋無調
- 第2回 調性音楽の時代
調性とオペラ：オペラが作曲された時期と調性音楽の時代との合致
- 第3回 オペラの誕生
C. モンテヴェルディの《オルフェオ》：ルネサンス音楽からバロック音楽へ
- 第4回 ヴェネツィア楽派のオペラ
C. モンテヴェルディの《ポッペアの戴冠》：カデンツ的思考＝構成の原理の完成
- 第5回 ナポリ楽派のオペラ
A. ヴィヴァルディの《モンテズーマ》：音楽の感覚的喜び、カストラートの活躍
- 第6回 ヘンドルのオペラ
G. F. ヘンドルの《ユリウス・カエサル》：バロックオペラの完成
- 第7回 古典派時代のオペラ
W. A. モーツァルトの《フィガロの結婚》：オペラに見る古典派的形式感、革命思想の前兆
- 第8回 初期ロマン派イタリア・オペラ（1）
V. ベッリーニの《ノルマ》：カヴァティーナ＝カバレッタ形式の確立
- 第9回 初期ロマン派イタリア・オペラ（2）
G. ヴェルディの《ナブッコ》：オペラの社会的役割、人間の心理描写
- 第10回 盛期ロマン派イタリア・オペラ（1）
G. ヴェルディの《リゴレット》：悲劇性の追求、市民音楽としてのオペラ
- 第11回 盛期ロマン派イタリア・オペラ（2）
G. ヴェルディの《椿姫》：身近な登場人物、日常性の導入の始まり
- 第12回 後期ロマン派イタリア・オペラ（1）
G. プッチーニの《蝶々夫人》：異国趣味、番号オペラから通作オペラへ
- 第13回 後期ロマン派イタリア・オペラ（2）
R. レオンカヴァッロの《道化師》：ヴェリズモ・オペラ、オペラの属性の喪失
- 第14回 結び
調性音楽における歌芝居＝オペラ
- 第15回 まとめ

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
レポートの提出により評価する。
欠席、遅刻、早退及び授業を妨げる行為は減点の対象とする。

日本音楽特講		担当教員	いりえ のぶこ 入江 宣子
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2単位	2年次通年	選択

[1] 授業のねらい

自分自身も日本語、動作、遊び歌など、日常生活の中で日本音楽の性格を体現していることに気付かせるとともに、伝統芸能の代表的種目である歌舞伎、能狂言、雅楽、仏教音楽についての基本知識を学ぶ。また芸術音楽と民俗音楽とは連続していることを北陸の民俗芸能を例にしながら認識させたい。

[2] 授業の計画

- 第 1 回～第 2 回 自分の中の「日本音楽」であるわらべ歌をうたい採譜する
- 第 3 回～第 4 回 日本人の音楽の特徴（リズム・音階・音色など）
- 第 5 回～第 7 回 歌舞伎（歴史・音楽・「勸進帳」「京鹿子娘道成寺」視聴）
- 第 8 回～第 10 回 能狂言（歴史・楽器・「船弁慶」「道成寺」視聴）
- 第 11 回～第 12 回 雅楽（歴史・楽器・「越殿楽」・舞楽）
- 第 13 回～第 14 回 仏教音楽（「お水取り」「花会式」「真言声明」、真宗の「坂東曲」）
- 第 15 回 まとめと小論文

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
 学年末の小論文の成績により評価する。
 欠席、遅刻、早退及び授業を妨げる行為は減点の対象とする。

[4] 教 材

講義中に配布するプリントを使用していく。

[5] 参考図書

- 増本伎共子『雅楽入門』（音楽之友社 2000）
- 三浦裕子『能・狂言の音楽入門』（音楽之友社 1998）

演奏解釈論		担当教員	たかや みつのぶ 高谷 光信
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2単位	2年次通年	必修

[1] 授業のねらい

本講義では、交響曲・協奏曲・合唱曲等を通して演奏解釈について研究する。実践として楽曲の演奏、指揮、映像鑑賞等を通して深く作品の解釈を深める。演奏の解釈をする上で必要な知識と感性を磨く。

[2] 授業の計画

授業では設定されたそれぞれのテーマに沿って多面的なアプローチを行っていく。

- | | |
|---------------|--|
| 第 1 回～第 2 回 | <ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション ・指揮法の基礎習得 ・合唱曲等の指揮を通して演奏解釈を深める ・オーケストラリハーサルの鑑賞を通して |
| 第 5 回～第 8 回 | <p>『交響曲・合唱曲』の世界：
Mozart-Beethoven-Brahms-Dvorak－日本人作曲家の「交響曲・合唱曲」の研究
形式や歴史的な背景をさぐりつつ、交響曲・合唱曲のもつ意味を導き出す</p> |
| 第 9 回～第 12 回 | <p>『協奏曲』の世界：
Grieg-Tchaikovsky-Sibelius-Rachmaninov の「協奏曲」の研究
楽器の音域・音色・テクニックなどについて研究し、ヴァイオリン・ピアノ協奏曲等の成り立ちについて考察してゆく</p> |
| 第 13 回 | <p>『イメージ』の世界：
・管弦楽曲を観賞して自発的なイメージの創りだす。</p> |
| 第 14 回～第 15 回 | <p>『音楽と人とのつながり』
音楽を通して人間同士が交流を持つ意味について考察する
(映画観賞)</p> |

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
レポート・提出物によって評価する。
欠席、遅刻、早退及び授業を妨げる行為は減点の対象とする。

[4] 教 材

楽譜等は当方で用意します。

比較演奏論		担当教員	おおくぼこうじ やましたきんや なかのけんや つちだえいすけ 大久保功治・山下金彌・中野研也・土田英介	
授業の種類	単位数	配当学年・時期		必修・選択
講義	2単位	1年次通年		選択

[1] 授業のねらい

音楽作品の演奏表現に関して、多面的な分野からの比較・考察を試みることにより、演奏行為におけるイメージの描き方や作品全体の背景を研究・考察する。

[2] 授業の計画

授業は下記の内容より4名によるオムニバス形式によって進めていく。

<大久保担当分>

バロックから現代に至るフルートのための諸作品を通して、音楽史の流れを比較・分析する。

第1回 バロック時代のフルート作品に見られる演奏スタイル

第2回 古典派フルート・ソナタにみられる時代的変遷

第3回 ベーム式フルートの発明が音楽史にもたらしたもの

第4回 現代音楽におけるフルート作品とその奏法について

<中野担当分>

ピアノによる音楽の表現法について、様々な演奏を聴くことで比較・考察を行うとともに、ピアノを中心とした音楽通史を修得する。

第1回 ピアノ独特の性格を知り、楽器としての表現を考える。

第2回 ピアノを中心とした鍵盤音楽の時代的変遷と、演奏法の変遷（1）

～バロック時代からロマン派黎明期にかけて～

第3回 ピアノを中心とした鍵盤音楽の時代的変遷と、演奏法の変遷（2）

～ロマン派から近・現代へ～

第4回 編曲作品について：オーケストラ、他楽器からピアノへ。ピアノから他楽器へ。

その編曲の目的と意味を探る。

第5回 ピアノ曲を題材に、音楽用語としてのイタリア語を見直す。

<山下担当分>

オーケストラ演奏の時代的比較研究：オーケストラの形態が時代と共にどの様に変遷していったか、その変化の過程を追いながら弦楽器を中心とした演奏表現の比較・分析を行う。

第1回 オペラの誕生とオーケストラの誕生・スコアの歴史

第2回 楽器編成の変遷・バッハ、ヘンデルのオーケストラの編成表

第3回 二重指揮・近代オーケストラへの発展の四段階

<土田担当分>

作曲家と演奏家の関わり：演奏家は作曲家の意図をどの程度汲み取ったか・より深い感動を与える演奏とは何か・演奏の本質とは何かを論じていく。

第1回～第3回 作曲家が目指した音色を、オーケストレーションの立場から分析し、ピアノ作品が如何に技法投入されたかを探ることにより、作曲家の意図を探る。

第4回～第5回 ベートーベンのピアノソナタの徹底分析を行い、演奏することの本質を探り、演奏表現への応用を考える。

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。

レポート・提出物によって評価する。欠席及び授業を妨げる行為は減点の対象とする。

[4] 教 材

ソナチネ・アルバム第1巻、バッハ平均律ピアノ曲集、ベートーベン ソナタ・アルバム1巻（ヘンレ版）、オーケストラの編成数表、演奏形態図解表
諸井三郎校閲『スコア・リーディング』（全音楽譜出版社）

[5] 参考図書

堀内敬三著『音楽史』
F・ドリアン著『演奏の歴史』、千蔵八郎他著『音楽史』、門馬直衛著『西洋音楽史』

演奏法研究 I		担当教員	おおくぼこうじ くらたか よ こ たかやみつのぶ 大久保 功 治・倉田佳代子・高谷 光 信
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	1 年次通年	必修

[1] 授業のねらい

音楽作品の演奏にあたっては、演奏者は作品の基本的な楽曲構成・演奏様式等を理解して、演奏表現にあたらなければいけない。授業においては音楽作品を多面的に、例えば音楽史的背景、社会的背景、作曲家の個性、及びその作曲技法や記譜法等の事柄や分野から、研究・考察することによりふさわしい演奏法を学習・研究する。

[2] 授業の計画

授業は下記の内容により、3名のオムニバス形式で進めていく。

<大久保担当分>

第 1 回～第 5 回 音楽学科において開催される音楽文化講座、特別講座及び公開講座の内容を元に、音楽作品の楽曲構成、演奏様式、演奏法等についてのセミナーを行う。同時に音楽活動や音楽教育の現況等を理解し、音楽文化活動とは何かを学んでいく。

<倉田担当分>

「鍵盤楽器」に関する楽曲を中心に教材として取り上げ、演奏における様式及びその演奏法について研究を行う。学習・研究にあたっては、原曲の構成内容を子細に分析して、その作品の真の姿を再現するため、下記の項目を取り上げる。

第 1 回 楽曲構成の基礎原理の学習（ツェルニー100 番、ブルグミュラー25 の練習曲）

第 2 回 対位法楽曲の構成原理の学習（バッハ作曲 2 声・3 声インヴェンション、平均律ピアノ曲集、組曲、前奏曲より）

第 3 回 学習用教材の研究（ソナチネアルバム、マグダレーナ・バッハの音楽帳、バルトークやプロコフィエフの子どものためのアルバムを元にして）

第 4 回～第 5 回 その他の楽曲研究

<高谷担当分>

第 1 回～第 5 回 『コンサート』の世界について研究を行う。演奏する側・聴く側の姿勢や心理について学びとる。「舞台マナーについての研究」、「日本における歴史的演奏会の鑑賞」、「世界の国際音楽祭の鑑賞」などを通して、実際に舞台に立つ意識を高める。

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。

演習実施状況、レポート提出によって評価する。欠席は減点の対象とする。

[4] 教 材

ツェルニー100 番、ブルグミュラー25 の練習曲、バッハ 2 声・3 声インヴェンション、平均律ピアノ曲集、フランス組曲、マグダレーナ・バッハの音楽帳等

[5] 参考図書

ピーター・クーパー著『ピアノの演奏様式』（シンフォニア）

演奏法研究Ⅱ		担当教員	おおくぼこうじ くらたか よ こ たかやみつのぶ 大久保 功 治・倉田 佳 代 子・高 谷 光 信
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	2 年次通年	選択

[1] 授業のねらい

演奏法研究Ⅰに引き続き音楽作品の楽曲構成、演奏様式及びその演奏法について研究する。Ⅱではさらにその範囲を広げ、室内楽曲、オーケストラ曲、声楽曲等についても取り上げ、多面的なアプローチを試みる。

[2] 授業の計画

授業は下記の内容により、3名のオムニバス形式で進めていく。

<大久保担当分>

第1回～第5回 音楽学科において開催される音楽文化講座、特別講座及び公開講座の内容を元に、音楽作品の楽曲構成、演奏様式、演奏法等についてのセミナーを行う。同時に音楽活動や音楽教育の現況等を理解し、音楽文化活動とは何かを学んでいく。

<倉田担当分>

鍵盤楽器の独奏曲だけにとどまらず、鍵盤楽器を含んだ室内楽曲を教材として取り上げ、演奏における様式及びその演奏法について研究を行う。また、楽曲については、Ⅰにおける古典派の作品からさらに拡大し、ロマン派・近代への作品についても、その内容を分析していく。

第1回 ソナタ形式の研究／ハイドン・モーツァルト・ベートーヴェン及び、ロマン派の楽曲

第2回 変奏形式の研究／モーツァルト・ベートーヴェン等の作品から近代作品へ

第3回 演奏技法の研究／ショパン・リストの作品及び、モシュコフスキーのエチュード等を中心に

第4回～第5回 その他の楽曲研究

<高谷担当分>

第1回～第5回 『コンサート』の世界について研究を行う。演奏する側・聴く側の姿勢や心理について学びとる。「舞台マナーについての研究」、「日本における歴史的演奏会の鑑賞」、「世界の国際音楽祭の鑑賞」などを通して、実際に舞台に立つ意識を高める。

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。

演習実施状況、レポート提出によって評価する。欠席は減点の対象とする。

[4] 教 材

ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト、ショパン、リストの諸ピアノ作品。ルネサンス、バロック、ロココの作曲家のチェンバロ作品。

[5] 参考図書

ヨーゼフ・ディッヒラー著『ピアノ演奏法の芸術的完成』（音楽之友社）

重唱		担当教員	つぼた のぶこ 坪田 信子
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2 単位	1 年次通年	選択

[1] 授業のねらい

主にア・カペラ（無伴奏）作品を題材として、純粹な声の響き合いを感じとり、少人数の声のアンサンブルを通じて、一人一人の表現技術を培う事を目標とする。

中世から近代までの代表的な重唱曲及び歌劇中の重唱作品の中から、学生の能力、個性に適した曲を選び、時代背景と人間の声の関わりに観点をしぼり演習する。

[2] 授業の計画

- 第 1 回～第 3 回 コールユーブンゲン巻 2 によるアンサンブルトーンの研究
- 第 4 回～第 6 回 スカルラッティ・ヴィヴァルディ・バッハ等バロック作品
- 第 7 回～第 9 回 コールユーブンゲン巻 3（合唱教本）によるアンサンブル
- 第 10 回～第 12 回 イタリア古典曲、近代作曲家歌曲の重唱用アレンジ作品
- 第 13 回～第 15 回 主にモーツァルト歌劇よりオペラ・アンサンブルの研究

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
 公開発表により評価する。欠席は減点とする。

[4] 教 材

コールユーブンゲン第 2 巻、第 3 巻・毎回のプリント配布

[5] 参考図書

必要に応じた CD の紹介と鑑賞

オペラ研究		担当教員	つぼた のぶこ こまき しんすけ 坪田 信子・小牧 伸輔
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2単位	2年次通年	選択

[1] 授業のねらい

総合芸術たるオペラ表現への入門編として、ここでは、これまでに学習してきた独唱形式の歌唱表現を一步出て、演技を伴った、複数の人物との共演を主活動としたオペラ表現の研究を目指すものとする。

主としてモーツァルトの歌劇作品を題材として、二重唱、三重唱等アンサンブルの曲を取り上げ、物語の内容、その場面、登場人物一人一人のキャラクターの洗い出し、必要最小限の簡易な舞台効果装置（衣装・小道具等）の考案に至るまでの研究を重ね、発表にまで到達する。

[2] 授業の計画

授業は2名の教員が前期、後期に分けて担当する。

<前期>坪田担当分

モーツァルト歌劇「フィガロの結婚」・「コジ・ファン・トゥッテ」より数曲選択し、次の項目を順を追って研究を進める。

- 第1回～第2回 ディクショントラブル（読みと言葉の分析）
- 第3回～第4回 セッコとアリア（叙唱と詠唱の対比）
- 第5回～第6回 登場人物の性格描写（コントラストの表現）
- 第7回～第8回 動きの構成と舞台効果（衣装・小道具の作製）
- 第9回～第10回 V D等による研究
- 第11回～第12回 演奏協力指導員（男声）の共演を得てリハーサル
- 第13回～第14回 演奏協力指導員（男声）の共演を得て本番発表
- 第15回 演奏会の録画を再生して研究

<後期>小牧担当分

モーツァルト作曲／歌劇「魔笛」について

この歌劇がドイツ語で書かれた経緯を知り、その内容について考察し、歌劇の中の重唱、アリアを研究する。授業においては同オペラより、Nr. 22「愛を感じる男たちには、やさしい心もそなわっているもの」、Nr. 53「パ、パ、パ、パパゲーナ」等を教材に取り上げ、下記を研究、学習する。

- ① ドイツ語の正しい発音
- ② ドイツ語の正しい表現（リアクションを考察）
- ③ 登場人物の性格、歌劇での役割の考察と、動き・演技の研究
- ④ 演奏指導協力員（男声）の共演を得て発表

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。

演奏会における表現により評価する。欠席は減点する。

[4] 教 材

より人物像に近づくために日本語表現とするが、訳本プリントを使用<坪田担当分>

[5] 参考図書

V Dを随時鑑賞・紹介

重奏		担当教員	おおくぼこうじ くらたかよこ なかのけんや 大久保功治・倉田佳代子・中野研也
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2単位	1年次通年	選択

[1] 授業のねらい

鍵盤楽器、弦楽器、管楽器を含めた重奏形態を基本的な演奏形式として、それぞれの時代、楽派に応じた演奏スタイルを学ぶ。同時に、複数の演奏者による演奏体験を通して、楽曲における個々の楽器の音楽的役割を学習し、楽曲構成上の重要な役割をもつアゴーギク、ディナーミク、和声法等の高度な音楽的語法の研究を行う。主として、前期はバロック及び、古典派の室内楽曲、後期においては古典派およびロマン派の室内楽曲を教材として取り上げる。

[2] 授業の計画

大久保、倉田、中野の3つのクラスに分け、前期と後期の2期にわたって下記の内容を指す。

〈前期〉 バロック及び、古典派の室内楽曲を主として教材として取り上げ、下記の計画に沿って進められる。

第1回 受講生の能力に応じたが曲を選曲し、発表会に向けての計画などを立案していく。

第2回～第4回 与えられた楽曲、およびその作曲者の時代的、歴史的背景について理解を深めつつ、楽曲全体の流を把握しながら演奏を進めていく。

第5回～第8回 楽曲における個々の楽器（プレイヤー）の役割を分析しながら、効果的な音楽表現のありかたを理解、学習していく。

第9回～第11回 アゴーギク、ディナーミクなどに細心の注意を払い、また和声法、旋律法など多面的な角度から再度作品の分析を試みつつ完成度の高い演奏を目指す。

第12回～第14回 クラス別に発表会を行い、演奏表現に対する討議、研究を行い、客観的に自分たちの演奏を振り返る機会を持つ。

第15回 演奏会において発表を行う。

〈後期〉 古典派及び、ロマン派の室内楽曲を主として教材として取り上げ、前期と同様の計画に沿って授業を進めて行く。

第16回 受講生の能力に応じたが曲を選曲し、発表会に向けての計画などを立案していく。

第17回～第19回 与えられた楽曲、およびその作曲者の時代的、歴史的背景について理解を深めつつ、楽曲全体の流を把握しながら演奏を進めていく。

第20回～第23回 楽曲における個々の楽器（プレイヤー）の役割を分析しながら、効果的な音楽表現のありかたを理解、学習していく。

第24回～第26回 アゴーギク、ディナーミクなどに細心の注意を払い、和声法、旋律法など多面的な角度から再度作品の分析を試みる。完成度の高い演奏を目指す。

第27回～第29回 クラス別に発表会を行い、演奏表現に対する討議、研究を行い、客観的に自分たちの演奏を振り返る機会を持つ。

第30回 演奏会において発表を行う。

[3] 評価の方法

実技が中心のため、授業期間中にその都度評価する。実技試験の結果を最重点とするが、毎週の授業進度等を加味して評価する。欠席は減点する。

[4] 教材

教材については、その年度の受講生の構成によって適切な楽曲を選ぶ。

アンサンブル		担当教員	おおくぼこうじ くらたかよこ なかのけんや 大久保 功治・倉田佳代子・中野 研也
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2 単位	2 年次通年	選択

[1] 授業のねらい

本授業は、1年次における「重奏」の基礎を元とした応用的授業として位置づけ行われるものである。ここでは、さらに高度で難易度の高い楽曲を教材として選択し、幅広く柔軟性に富んだアンサンブル能力の育成を目指していく。主として、前期にはロマン派及び、後期ロマン派の楽曲、後期においては近代から現代に至る室内楽曲を教材として取り上げる。

[2] 授業の計画

大久保、倉田、中野の3つのクラスに分け、前期と後期の2期にわたって下記の内容を指導する。

〈前期〉 ロマン派及び、後期ロマン派の楽曲を主として教材として取り上げ、下記の計画に沿って進められる。

第1回 受講生の能力に応じたが曲を選曲し、発表会に向けての計画などを立案していく。

第2回～第4回 与えられた楽曲、およびその作曲者の時代的、歴史的背景について理解を深めつつ、楽曲全体の流を把握しながら演奏を進めていく。

第5回～第7回 楽曲における個々の楽器（プレイヤー）の役割を分析しながら、効果的な音楽表現のありかたを理解、学習していく。

第8回～第19回 ロマン派及び、後期ロマン派の楽曲の特徴を表現している楽曲を選び、CDやVTR等での鑑賞を行い、その時代の音楽の特徴を体験的に学習しながら、アンサンブルを進めて行く。

第10回～第12回 アゴーギク、ディナーミクなどに細心の注意を払い、また和声法、旋律法など多面的な角度から再度作品の分析を試みつつ、完成度の高い演奏を目指す。

第13回～第14回 クラス別に発表会を行い、演奏表現に対する討議、研究を行い、客観的に自分たちの演奏を振り返る機会を持つ。

第15回 演奏会において発表を行う。

〈後期〉 後期ロマン派、近代、現代の室内楽曲を主として教材として取り上げ、前期と同様の計画に沿って授業を進めて行く。

第16回 受講生の能力に応じたが曲を選曲し、発表会に向けての計画などを立案していく。

第17回～第19回 与えられた楽曲、およびその作曲者の時代的、歴史的背景について理解を深めつつ、楽曲全体の流を把握しながら演奏を進めていく。

第20回～第22回 楽曲における個々の楽器（プレイヤー）の役割を分析しながら、効果的な音楽表現のありかたを理解、学習していく。

第23回～第24回 近代、現代における新しい記譜法、複雑で高度な和声等についての文献学習及び、楽曲についてCD、VTR等による鑑賞を行い、高度な音楽的表現について理解をしながら、アンサンブルの完成を目指す。

第25回～第27回 近代、現代の音楽に特徴的な、幅のある、動きのある、豊かなアゴーギク、ディナーミクなどに細心の注意を払いながら、再度作品の分析を試みる。

第28回～第29回 クラス別に発表会を行い、演奏表現に対する討議、研究を行い、客観的に自分たちの演奏を振り返る機会を持つ。

第30回 演奏会において発表を行う。

[3] 評価の方法

実技が中心のため、授業期間中にその都度評価する。実技試験の結果を最重点とするが、毎週の授業進捗等を加味して評価する。欠席は減点する。

[4] 教材

教材については、その年度の受講生の構成によって適切な楽曲を選ぶ。

即興演奏技法		担当教員	かわの ひさとし 河野 久寿
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	2 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

音楽活動の現場において、様々な形で即興演奏の技能を必要とされるケースが数多くある。それらは、旋律への伴奏付けといったものから、教育現場や音楽療法におけるグループセッションの演目といったものまで、多種多様である。そこで本授業では、様々なジャンルの即興演奏について論じるとともに、その応用について実践を交えながら考察してゆく。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 旋律の変奏、モチーフの展開①
- 第 2 回 旋律の変奏、モチーフの展開②
- 第 3 回 旋律の変奏、モチーフの展開③
- 第 4 回 旋律の変奏、モチーフの展開④
- 第 5 回 旋律の変奏、モチーフの展開⑤
- 第 6 回 旋律の変奏、モチーフの展開⑥
- 第 7 回 旋律の変奏、モチーフの展開⑦
- 第 8 回 旋律の変奏、モチーフの展開⑧
- 第 9 回 旋律の変奏、モチーフの展開⑨
- 第 10 回 旋律の変奏、モチーフの展開⑩
- 第 11 回 フリー インプロヴィゼーション①
- 第 12 回 フリー インプロヴィゼーション②
- 第 13 回 フリー インプロヴィゼーション③
- 第 14 回 フリー インプロヴィゼーション④
- 第 15 回 実技

[3] 評価の方法

試験期間中に試験は実施しない。

各講義毎に行う実技と第 15 回にて行う最終実技試験にて評価する。

[4] 教 材

岩間 稔『ピアノ即興演奏法 (改訂版)』(ヤマハ音楽振興会 1990)

[5] 参考図書

授業担当教員が適宜指示する。

歌唱指導法		担当教員	つぼた のぶこ 坪田 信子
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	1 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

日本語を媒体とした我が国の様々なジャンルの“歌”について、唱歌、童謡、流行歌、ポップス、商業音楽、民謡等の歌唱演奏を実体験して「歌唱」の魅力を再認識する事により、それぞれに特有の表現と発声法を比較研究する。

同時に、時代の変化と共に多様化する日本の「歌唱音楽」への検証を深め、“今、社会の現場で有効な歌唱指導法とは”を探究してゆく。

[2] 授業の計画

授業は、下記の項目に沿って進められる。

- 第 1 回～第 5 回 「唱歌・童謡の歌唱法」
日本語の発音と発声について入門
- 第 6 回～第 8 回 「日本抒情名曲集」
歌詞の解釈をとおした歌唱表現
- 第 9 回～第 10 回 「流行歌・ポップスの歌唱法」
時代背景と社会現象を探るの表現
- 第 11 回～第 12 回 「日本民謡の歌唱法」
民謡歌手に学ぶ実体験
- 第 13 回～第 14 回 「歌唱指導計画」
指導計画案作成と模擬実習
- 第 15 回 「歌唱指導の実際」
児童施設・病院・社会福祉施設現場での実践

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。

公開実習により評価する。欠席及び授業を妨げる行為は減点する。

[4] 教 材

『日本唱歌名曲集 〈附 日本唱歌発達史〉』（全国音符出版社）

音楽療法特論		担当教員	ぬき みちこ 貫 行子
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2単位	1年次後期	選択

[1] 授業のねらい

音楽療法の学術的な意味をいっそう深めるために、学生が受動的に講義を受けるだけでなく、能動的に「どのような研究がなされているか」を探索する。数多くの研究を知り、分析することによって、自分の将来の方向を定める。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 人間と音楽療法の意味
- 第 2 回 音楽療法の文化的背景と社会的設定の重要性
- 第 3 回 音楽療法の記録と評価
- 第 4 回～第 5 回 音楽療法臨床研究 子ども
身体障害、発達障害、情緒障害
- 第 6 回～第 7 回 音楽療法臨床研究 成人
精神障害、知的障害、リハビリテーション、緩和ケア（ホスピス）
- 第 8 回～第 9 回 音楽療法臨床研究 高齢者
老年学、痴呆症のために、予防医学
- 第 10 回～第 11 回 音楽療法文献研究
アメリカ音楽療法協会の論文集から
- 第 12 回～第 13 回 音楽療法に関連する他の心理療法
カウンセリング、家族療法、遊戯療法、動作法、回想法など
- 第 14 回～第 15 回 専攻科修了（学位）論文テーマの決定とその進め方
学位授与機構に提出する修了論文が重要な課題である。

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
課題の提出により評価する。欠席及び授業を妨げる行為は減点する。

[4] 教 材

『2005 音楽心理学音楽療法研究年報』第 33 巻（日本音楽心理学音楽療法懇話会）

[5] 参考図書

パヴリチェヴィク著／佐治・高橋訳『音楽療法の意味』（本の森・仙台 2002）
貫 行子・星野悦子共著『音楽療法 研究と論文のまとめ方』（音楽之友社 2002）
プリーストリー著／若尾 裕他訳『分析的音楽療法とは何か』（音楽之友社 2002）
『日本音楽療法学会誌』（日本音楽療法学会、毎年）

臨床音楽療法論		担当教員	のじり えみこ かさしま みちこ 野尻 恵美子・笠嶋 道子
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	1 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

この授業の前半では発達障害児に対する音楽療法についての理解を深める。まずは個々の障害についての学習を行い、音楽療法においてどのような支援が可能であるかを事例別に検討する。後半では精神科領域で行われている音楽療法を、現場の事例検討を中心にしながら学ぶ。対象者の障害、生活環境、またその心理など、出来るだけ幅広い視点から対象者の置かれている状況を捉えていく。それを通し、その現場での音楽療法へのニーズや実際に行うにあたっての配慮や他職種との連携なども考えていく。

[2] 授業の計画

<野尻担当分>

- 第 1 回 知的障害児とは その分類、症状について
- 第 2 回 知的障害児を対象とした音楽療法の実践紹介
- 第 2 回 広汎性発達障害児について その分類、症状、心理的特性について(自閉症を除く)
- 第 4 回 広汎性発達障害児に対する音楽療法の実践紹介(自閉症を除く)
- 第 5 回 自閉症児とは その症状、心理的特性について
- 第 6 回 自閉症児に対する音楽療法の実践紹介 事例 1
- 第 7 回 自閉症児に対する音楽療法の実践紹介 事例 2

<笠嶋担当分>

- 第 8 回 精神科の患者について (その回復過程での様々な状況)
- 第 9 回 精神科の音楽療法
- 第 10 回 ワークショップ～現場での音楽・その 1～
- 第 11 回 デイケアでの音楽療法技法
- 第 12 回 ワークショップ～現場での音楽・その 2～
- 第 13 回 病院での音楽療法技法
- 第 14 回 ワークショップ～現場での音楽療法技法～
- 第 15 回 まとめ

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
レポートにより評価する。欠席及び授業を妨げる行為は減点の対象とする。

[4] 教 材

プリント配布
『歌謡曲のすべて (赤本)』(全音出版)

コーラス演習Ⅰ		担当教員	こまき しんすけ 小牧 伸輔
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2単位	1年次通年	選択

[1] 授業のねらい

ここでは主に、ヨーロッパ・ロマン派から近代にかけてのア・カペラ作品より題材を選び、その作品の歴史的民族的背景を踏まえた作品解釈の視点を持つと同時に、表現の基礎となる更に高度な音程・音質感覚、リズム感、ハーモニー感などを練磨、学習する。

[2] 授業の計画

授業は、下記の内容にそって進められる。

第1回～第4回 各パートの音程練習及びリズム練習。

第5回～第6回 歌詞について考えながら、演奏を行う。

第7回～第10回 楽曲構造を理解しながら演奏を行う。

第11回～第13回 歌詞とメロディーの把握。

第15回～第18回 楽曲に表れたハーモニーについて考えながら、演奏を行う。

第19回～第30回 上記について繰り返し反復練習を行いながら、高度に磨き上げられた作品の完成を目指す。

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。

実技が中心のため、授業期間にその都度評価する。欠席及び授業を妨げる行為は減点の対象とする。

[4] 教材

随時指示する。

[5] 参考図書

船山信子編『ある「完全な音楽家」の肖像 マダム・ピュイグ=ロジェが日本に遺したもの』
(音楽の友社)

コーラス演習Ⅱ		担当教員	こまき しんすけ 小牧 伸輔
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2単位	2年次通年	選択

[1] 授業のねらい

コーラス演習Ⅰで培った「合唱する」様々な基本姿勢を元に、題材を現代の邦人作曲家の合唱作品から選曲して、詩と作品の解釈、読みと発音・発声の関わり、ハーモニー訓練（和声分析）などの観点から演習していく。

[2] 授業の計画

授業は、下記の内容にそって進められる。

第1回～第4回 各パートの音程練習及びリズム練習。

第5回～第6回 歌詞について考えながら、演奏を行う。

第7回～第10回 楽曲構造を理解しながら演奏を行う。

第11回～第13回 歌詞とメロディーの把握。

第15回～第18回 楽曲に表れたハーモニーについて考えながら、演奏を行う。

第19回～第30回 上記について繰り返し反復練習を行いながら、高度に磨き上げられた作品の完成を目指す。

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。

実技が中心のため、授業期間にその都度評価する。欠席及び授業を妨げる行為は減点の対象とする。

[4] 教材

随時指示する。

[5] 参考図書

船山信子編『ある「完全な音楽家」の肖像 マダム・ピュイグ=ロジェが日本に遺したもの』
(音楽の友社)

演奏研究		担当教員	大久保功治・倉田佳代子・中野 研也 坪田 信子・山下 金彌・武内 紘一
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2 単位	2 年次通年	選択

[1] 授業のねらい

演奏家として欠かすことのできない音楽表現の場として、公開演奏会（学内におけるジョイント・リサイタル）を設け発表を行う。演奏会の遂行にあたって生じる、音楽面での諸問題及び、運営面での諸問題を学生に経験させることにより、演奏家としての柔軟性のある、幅広い能力の育成を目指すものである。

[2] 授業の計画

授業はピアノ、電子オルガン、管楽器、弦楽器、声楽の五つの分野にクラス分けをして実習する。

〈ピアノの分野〉倉田・中野の2つのクラスに分け、それぞれに下記の内容を指導していく。ピアノ・ソナタの全楽章、組曲等多楽章形式の楽曲、変奏曲等の全曲演奏を通じて、長時間にわたる集中力を維持し、変化に富む面白い内容の音楽表現を養う。

- 第 1 回～第 2 回 個人の演奏技能、音楽性、学習能力、学習過程に応じた選曲の指導を行う。
- 第 3 回～第 4 回 学習上の問題点の抽出とその練習計画についての指導を行う。
- 第 5 回～第 6 回 演奏予定曲の楽曲分析の実施を行う。
- 第 7 回～第 8 回 演奏予定曲の作曲家に関する研究の方法論を助言指導を行う。
- 第 9 回～第 10 回 作品演奏に関するレポート制作に関する助言指導を行う。
- 第 11 回～第 12 回 演奏会のプログラム作成の助言指導を行う。
- 第 13 回～第 14 回 他のグループとのリハーサルと実施、および相互批判を行う。
- 第 15 回 ジョイント・リサイタルの実施。

〈電子オルガンの分野〉武内担当分

公開の場でじっくりと演奏する喜びを体感することの出来る絶好の場である演奏会の空気を感じながら、音楽的裏付けのある表現と集中力の持続を養う。

- 第 1 回～第 2 回 個人の能力を考慮し、演奏曲目の選定作業を指導。編曲資料収集の助言
- 第 3 回～第 4 回 編曲楽譜作成に向け、譜読みと楽曲分析、編曲資料の仕分け、問題箇所
の指摘、練習計画の確認。
- 第 5 回～第 6 回 編曲楽譜手直し。オーケストレーションの組み込み作業指導。
- 第 7 回～第 8 回 楽曲、作曲家研究に平行して編曲楽譜を仕上げる。
- 第 9 回～第 10 回 演奏表現研究の傍ら、楽曲、編曲に関するレポート作成の助言指導。
- 第 11 回～第 12 回 演奏会プログラム作成に関する原稿への助言、指導をする。
- 第 13 回～第 14 回 他のグループとのリハーサルと実施、それぞれについて自由に討議、課
題箇所を見つけて最終仕上げに組み込む。
- 第 15 回 ジョイント・リサイタルの実施。

〈管楽器の分野〉 大久保担当分

管楽器の演奏を通して、個性を生かした音楽表現能力の向上を目指す。下記の項目について理解、学習、研究を行い、演奏家としての幅広い総合的な能力を身に付ける。

- 第 1 回～第 2 回 個々の能力にあった曲目をリストアップしながら、演奏曲目を決定する
- 第 3 回～第 4 回 楽曲や作曲家の時代背景について文献や資料を集め、演奏を側面から支える事項について学習していく。同時に正確な譜読をしつつ、楽曲のアナリゼを行う。
- 第 5 回～第 8 回 作曲家の意図を深く理解し、演奏者としてそれらをどう表現していくのか技術の向こう側にある音楽表現を目指して学習を進めていく。
- 第 9 回～第 10 回 自分なりの個性のもとに、下記に特に留意しながら楽曲をまとめて行く。
- ・高い難易度の技術練習に関する集中力を養う効果的な練習方法の考察
 - ・魅力のある音色づくり
 - ・ハーモニー感溢れる旋律線の構築
 - ・効果的なアゴギク、ディナーミクの研究と構築
 - ・速い息の支えによるダイナミックな歌表現の研究
 - ・ピアノ伴奏者とのバランス及び、音楽的な対話について研究する
- 第 11 回～第 12 回 演奏会のプログラムに掲載する曲目解説等について指導を行う。
- 第 13 回～第 14 回 他のグループとリハーサルを行いお互いの演奏について討議し、自分の演奏を客観的に見つめる機会を持つ。
- 第 15 回 ジョイント・リサイタルの実施。

〈弦楽器の分野〉 山下担当分

弦楽器と他の楽器との係わり合いについて、独奏曲と室内楽の両面から総合的に学習していく。主として古典派の独奏曲・室内楽曲を中心に持ち上げ、明確なアンサンブル技術の育成を目指す。また、それらを公開の場で演奏する機会を持ち、音楽面、運営面の諸問題の全ての事柄について学習する。

- 第 1 回～第 2 回 まず、どの時代の作品を取り上げるか、研究テーマの設定。演奏様式ならびに同時代の他の作品などについての考察。レッスンでは、運指・運弓・奏法の検討と確認。
- 第 3 回～第 4 回 音楽面、運営面の諸問題を検討し、体験する。プログラミングや解説、ステージマナー、演奏スタイルなど、レッスンを通して指導していく。フレージングやアーティキュレーションの確認と検討。
- 第 5 回～第 6 回 長時間にわたる演奏の緊張と集中力の維持、そしてペース配分の指導。
- 第 7 回～第 8 回 アンサンブルやポイントとなる音程の確認とアゴギクの徹底を指導。運営面の連絡、注意を促す。
- 第 9 回～第 10 回 リハーサルや当日の打合わせを、スタッフや他の楽器奏者と重ねる。レッスンではピアノ（他楽器）との音楽的内容の練習に入る。
- 第 11 回～第 14 回 長時間演奏に耐える体力や精神面を考慮に入れての練習及び、演奏当日を想定して音楽演奏面と運営面の確認。
- 第 15 回 ジョイント・リサイタルの実施。

〈声楽の分野〉 坪田担当分

歌曲・宗教曲又はオペラアリア（重唱曲も含む）のいずれかを主として作曲家及びその主要作品を選択し、更に魅力あるプログラム内容とするための附随曲を添えて、長時間の音楽的緊張と声楽演奏を遂行する高次元な楽しみを体験させる。また、これらの演習を通して、演奏曲の背景と詩（歌詞）の解釈、CD・VDによる表現研究、更に声楽演奏として不可欠な「品位あるステージマナー」の修練を積ませる。

第 1 回～第 3 回 「演奏研究」の選曲とプログラム構成

- ・より高度な声楽テクニックの修練を目指す
- ・重唱（オペラ・アンサンブル含む）、宗教曲、日本歌曲等、多彩なジャンルの開拓

第 4 回～第 11 回 楽曲分析と表現研究

- ・原語のディクショントラッキング重視、発音研究、詩の解釈
- ・録音学習による「聴き耳」の養成と確実な発声法の習得

第 12 回～第 14 回 「コンサート」の広報とプログラム作製

- ・ポスター作製と掲示・解説文・プログラムの印刷
- 「品位あるステージマナー」の研究
- ・リハーサル録画の研究・共演者との相互検討

第 15 回 ジョイント・リサイタルの実施

[3] 評価の方法

ジョイント・リサイタルにおける演奏を第一の評価とするが、さらに、楽曲分析・演奏会の企画・運営等に対する積極性と平素の授業態度（欠席及び授業を妨げる行為は減点の対象）を加味して行う。詳細は、「音楽学科履修の手引き」を参照のこと。

なお、学位を申請した者は、その録画ビデオとレジュメの提出によって認め評価することとする。

[4] 教 材

その都度、楽曲に関連する文献を紹介する。

学外演奏 I		担当教員	大久保功治・倉田佳代子・坪田 信子 山下 金彌・小牧 伸輔
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2 単位	1 年次通年	選択

[1] 授業のねらい

音楽学科においては年間数回の学外における演奏会。

①サマーコンサート 8 月上旬②定期演奏会 2 月下旬(2 会場にて)を開催し、日頃の学習の成果を発表している。

同時に学生は、音楽学科との緊密な連携のもとに、各自が自主企画、運営した演奏会、外部からの依頼を受けた演奏会等含め多くの演奏会に出演、参加し体験的な音楽の学習を行っている。

本授業では、このような各種の演奏会への出演、又それらに至る過程を通して、学生に地域社会における音楽の現状を理解させ、音楽家としての基本的な技量、態度などあるべき姿を体験学習させるべく指導を行うものである。

[2] 授業の計画

それぞれの演奏会について、①独奏・独唱、②アンサンブル、③合唱、④管弦楽の分野に合わせて指導を行う。独奏、アンサンブルの分野については、鍵盤楽器・管楽器・弦楽器・声楽の 4 つにクラス分けをして行う。また、合唱・管弦楽に関しては合同で指導を行う。

<独奏・独唱の分野> (倉田担当分)

- ①それぞれの演奏会の趣旨に合った演奏曲目の選曲
- ②ステージにおける効果的な演奏表現の研究
 - ・演奏会場でより良く響かせるためのタッチを考える
 - ・ホールの響きを考えたペダリングを考える
 - ・会場の音響に則したテンポの設定
 - ・演奏における集中力の養成
 - ・適切なステージマナーのあり方
- ③独奏楽器と他の楽器との演奏表現の比較と演習
 - ・CD、VTRなどの視聴を行う

(大久保担当分)

- ①それぞれの演奏会の趣旨に合った演奏曲目の選曲
- ②ステージにおける効果的な演奏表現の研究
 - ・演奏会場にあった息のスピードと音量
 - ・効果的なヴィブラートのかけ方
 - ・会場の音響に則したテンポの設定
 - ・ピアニストとの音量バランス
 - ・演奏における集中力の養成
 - ・適切なステージマナーのあり方
- ③独奏楽器と他の楽器との演奏表現の比較と演習
 - ・CD、VTRなどの視聴を行う

(山下担当分)

- ①それぞれの演奏会の趣旨に合った演奏曲目の選曲
- ②ステージにおける効果的な演奏表現の研究
 - ・演奏会場でより良く響かせるためのボーイング
 - ・ピアニストとの音量バランスとアンサンブルのあり方
 - ・会場の音響に則したテンポの設定
 - ・演奏における集中力の養成
 - ・適切なステージマナーのあり方
- ③独奏楽器と他の楽器との演奏表現の比較と演習
 - ・CD、VTRなどの視聴を行う

(坪田担当分)

- ①それぞれの演奏会の趣旨に合った演奏曲目の選曲
- ②ステージにおける効果的な演奏表現の研究
 - ・ステージにおける発声法
 - ・言葉の明確な表現方法
 - ・史と音楽の融合性
 - ・ピアニストとの音量バランスとアンサンブルのあり方
 - ・演奏における集中力の養成
 - ・適切なステージマナーのあり方
- ③独奏楽器と他の楽器との演奏表現の比較と演習
 - ・CD、VTRなどの視聴を行う

<アンサンブルの分野>

鍵盤楽器、管楽器、弦楽器、声楽の4つの専門分野にクラス分けを行い、下記の事柄に留意しながら指導していく。

- ①それぞれの演奏会の趣旨と合った演奏曲目の選曲
- ②独奏では培われることのないアンサンブルの魅力、他と協調することの楽しさなどを学ぶ。
- ③アンサンブルのテクニックの基本を学びとる
 - ・音程感覚 ・フレーズ感覚 ・和声感覚 ・インザッツと呼吸 ・ディナーミクとアコーギク
- ④パートにおける音楽的役割について学ぶ

<合唱の分野> (小牧担当分)

下記に留意しながら指導していく。

- ①それぞれの演奏会の趣旨と合った演奏曲目の選曲を行う。同時にパート分けを行う。
- ②ステージにおける効果的な合唱表現に関して下記に留意し練習を行う。
 - ・発声練習 ・正確なリズム音程 ・インザッツと呼吸 ・フレーズ感覚 ・和声感覚
- ③言葉とメロディーの関係を大切にした音楽表現を学ぶ。
 - ・個々のパートを十分意識しながら、その役割を理解すると同時に、周りとの響きの調和を感じ合唱でしか味わえることのない音楽的感動を得る。

<管弦楽の分野> (大久保担当分)

前期においては、8月に実施するサマーコンサート、後期においては、2月に実施する定期演奏会における管弦楽曲の学習を中心に指導を行う。指導における留意点は下記の通り。

- ①弦楽器、管楽器、打楽器、それぞれの分野の分奏を十分に行い、各分野の役割を理解する。
- ②分奏を通して、それぞれの分野の楽器の特性と音楽表現力の違いを学びながら指揮者と演奏者の音楽的関係を理解する。
- ③楽曲の構成やオーケストレーションを注意深く分析しながら、効果的なステージ演奏に臨む。

[3] 評価の方法

毎回の授業における学習態度（欠席及び授業を妨げる行為は減点の対象）と、それぞれの演奏会における演奏を評価して総合的に行う。

[4] 教材

その都度、効果的な教材を与える。

学外演奏Ⅱ		担当教員	大久保功治・倉田佳代子・山下 金彌 坪田 信子・小牧 伸輔
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2 単位	2 年次通年	選択

[1] 授業のねらい

学外演奏Ⅰに引き続き、その内容をさらに深める。

[2] 授業の計画

それぞれの演奏会について、①独奏・独唱、②アンサンブル、③合唱、④管弦楽の分野において指導を行う。独奏、アンサンブルの分野については、鍵盤楽器・管楽器・弦楽器・声楽の4つにクラス分けをして行う。また、合唱・管弦楽に関しては合同で指導を行う。

〈独奏・独唱の分野〉（倉田担当分）

- ①それぞれの演奏会の趣旨に合った演奏曲目の選曲
- ②ステージにおける効果的な演奏表現の研究
 - ・演奏会場でより良く響かせるためのタッチを考える
 - ・ホールの響きを考えたペダリングを考える
 - ・会場の音響に則したテンポの設定
 - ・演奏における集中力の養成
 - ・適切なステージマナーのあり方
- ③独奏楽器と他の楽器との演奏表現の比較と演習
 - ・CD、VTRなどの視聴を行う

（大久保担当分）

- ①それぞれの演奏会の趣旨に合った演奏曲目の選曲
- ②ステージにおける効果的な演奏表現の研究
 - ・演奏会場にあった息のスピードと音量
 - ・効果的なヴィブラートのかけ方
 - ・会場の音響に則したテンポの設定
 - ・ピアニストとの音量バランス
 - ・演奏における集中力の養成
 - ・適切なステージマナーのあり方
- ③独奏楽器と他の楽器との演奏表現の比較と演習
 - ・CD、VTRなどの視聴を行う

（山下担当分）

- ①それぞれの演奏会の趣旨に合った演奏曲目の選曲
- ②ステージにおける効果的な演奏表現の研究
 - ・演奏会場でより良く響かせるためのボーイング
 - ・ピアニストとの音量バランスとアンサンブルのあり方
 - ・会場の音響に則したテンポの設定
 - ・演奏における集中力の養成
 - ・適切なステージマナーのあり方
- ③独奏楽器と他の楽器との演奏表現の比較と演習
 - ・CD、VTRなどの視聴を行う

(坪田担当分)

- ①それぞれの演奏会の趣旨に合った演奏曲目の選曲
- ②ステージにおける効果的な演奏表現の研究
 - ・ステージにおける発声法
 - ・言葉の明確な表現方法
 - ・史と音楽の融合性
 - ・ピアニストとの音量バランスとアンサンブルのあり方
 - ・演奏における集中力の養成
 - ・適切なステージマナーのあり方
- ③独奏楽器と他の楽器との演奏表現の比較と演習
 - ・CD、VTRなどの視聴を行う

<アンサンブルの分野>

鍵盤楽器、管楽器、弦楽器、声楽の4つの専門分野にクラス分けを行い、下記の事柄に留意しながら指導していく。

- ①それぞれの演奏会の趣旨と合った演奏曲目の選曲
- ②独奏では培われることのないアンサンブルの魅力、他と協調することの楽しさなどを学ぶ。
- ③アンサンブルのテクニックの基本を学びとる
 - ・音程感覚 ・フレーズ感覚 ・和声感覚
 - ・アインザッツと呼吸 ・ディナミックとアコーギク
- ④パートにおける音楽的役割について学ぶ

<合唱の分野> (小牧担当分)

下記に留意しながら指導していく。

- ①それぞれの演奏会の趣旨と合った演奏曲目の選曲を行う。同時にパート分けを行う。
- ②ステージにおける効果的な合唱表現に関して下記に留意し練習を行う。
 - ・発声練習 ・正確なリズム音程 ・アインザッツと呼吸
 - ・フレーズ感覚 ・和声感覚
- ③言葉とメロディーの関係を大切にした音楽表現を学ぶ。
 - ・個々のパートを十分意識しながら、その役割を理解すると同時に、周りとの響きの調和を感じ合唱でしか味わえることのない音楽的感動を得る。

<管弦楽の分野> (大久保担当分)

前期においては、8月に実施するサマーコンサート、後期においては、2月に実施する定期演奏会における管弦楽曲の学習を中心に指導を行う。指導における留意点は下記の通り。

- ①弦楽器、管楽器、打楽器、それぞれの分野の分奏を十分に行い、各分野の役割を理解する。
- ②分奏を通して、それぞれの分野の楽器の特性と音楽表現力の違いを学びながら指揮者と演奏者の音楽的関係を理解する。
- ③楽曲の構成やオーケストレーションを注意深く分析しながら、効果的なステージ演奏に臨む。

[3] 評価の方法

毎回の授業における学習態度（欠席及び授業を妨げる行為は減点の対象）と、それぞれの演奏会における演奏を評価して総合的に行う。

[4] 教材

その都度、効果的な教材を与える。

鍵盤楽器 A I		担当教員	倉田佳代子・中野 研也・木下 由香 桂屋 京子・辻本 加代子
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
実技	2 単位	1 年次前期	選択

<p>[1] 授業のねらい</p> <p>個人の身体的条件、音楽的習熟度に応じて楽曲を選択し、既に学習した音楽楽理の知識の演奏への転換をはかる。また、同時に芸術的表現に即した柔軟で洗練された演奏技法の習得をはかる。</p>	
<p>[2] 授業の計画</p> <p>授業はピアノと電子オルガンに分けてクラス別に行う。</p> <p>〈ピアノ〉(倉田、中野、木下、桂屋担当)</p> <p>第 1 回 個人別能力診断。個人別課題の提示。テキストの指定。</p> <p>第 2 回～第 5 回 学習 a 演奏技法習得上の個人別問題点の発見と練習法の確認 学習 b 個人に必要な練習曲の提示と練習方法の指導 脱力、ハーモニー感、アップビートと拍子感、調性感、重音奏法、複合リズム等を運動の生理に従い解明する。</p> <p>学習 c 自由曲課題の研究。楽曲分析、奏法課題の検出。</p> <p>第 6 回 バッハ課題のテスト</p> <p>第 7 回～第 13 回 学習 a～c の継続。 自由曲課題の作品内容と作曲者に関する研究。演奏の訓練。ステージ演奏の心得。</p> <p>学習 d バッハ/平均律ピアノ曲集の課題の提示と選曲。学習。</p> <p>第 14 回 自由曲テスト</p> <p>第 15 回 実技テスト内容の検討と次期課題の提示と解説</p> <p>〈電子オルガン〉(辻本担当)</p> <p>電子オルガンを客観的に捉え、楽器としての可能性を追求する自発性を育むべく、学生の個性、能力に応じて選択したアンサンブル楽曲を教材に用いて、弦楽器、木管楽器から楽器法、編曲法を習得、演奏する。下記の 3 点に主眼を置きながら、15 週の個人レッスンを進めていく。</p> <p>(1) 課題曲の編曲 (三段譜オルガン独奏用楽譜作成)</p> <p>(2) 各楽器奏法理解、オーケストレーション、アナリーゼ、鍵盤奏法研究</p> <p>(3) アンサンブル楽器としての実践研究</p>	
<p>[3] 評価の方法</p> <p>試験期間中の試験は実施しない。</p> <p>バッハ課題曲テスト、自由曲テスト (演奏時間 12 分以内の楽曲) の結果により評価する。</p>	
<p>[4] 教 材</p> <p>バッハ/平均律ピアノ曲集 (ヘンレ出版社、音楽之友社) ～原典版を使用のこと。</p> <p>自由曲/バロック、古典派、ロマン派 (ヘンレ原典版、ウィーン原典版)</p> <p>ショパン (パデレフスキー編集版、ヘンレ原典版)</p> <p>ドビュッシー、ラヴェル (デュラン版) リスト (ブダペスト版)</p> <p>プロコフィエフ、ラフマニノフ (ブージー&ホークス) 等</p>	
<p>[5] 参考図書</p> <p>ハンス・メルスマン著『モーツァルトの本質』(美学社 1991) 『新訳ベートーヴェン』(美学社)</p> <p>土田英介著『バッハ平均律クラヴィーア曲集第 1 巻』 『演奏のための分析ノート』(音楽之友社)</p> <p>F. ノイマン、為下章子著『正しい装飾音楽法』(音楽之友社 2000)</p> <p>下位英一、坂本鉄男『イタリア語小事典』(大学書林 1962)</p>	

鍵盤楽器 A II		担当教員	倉田佳代子・中野 研也・木下 由香 桂屋 京子・辻本 加代子	
授業の種類	単位数	配当学年・時期		必修・選択
実技	2 単位	1 年次後期		選択

[1] 授業のねらい

A I に引き続き、ピアノ演奏法の芸術的完成を目指す。特に作品に対する深い理解と共感をもって学習と演奏に当たれるようにする。同時に、対位技法による楽曲への理解を深いものとし、感動をもって演奏表現で切るようにする。

[2] 授業の計画

授業はピアノと電子オルガンに分けてクラス別に行う。

<ピアノ> (倉田、中野、木下、桂屋担当)

- (1) ハーモニー力学の分析研究～小節構造、拍節構造、動機の形成原理との関わり等
(2) 課題曲研究 (モシュコフスキー、ショパン、リスト、ドビュッシーの練習曲)
- 第 1 回～第 5 回 学習 a 演奏技法習得上の個人別問題点の発見と練習法の再確認。
学習 b 個人的に必要なバッハ課題曲の分析と練習方法の指導。
プレリュードの多義性、フーガの対位法的作法と和声との関わり。
時代様式の解明。
- 学習 c 自由曲課題の研究。楽曲分析、練習計画。
- 第 6 回 練習曲課題のテスト。
- 第 7 回～第 13 回 学習 a～c の継続。
自由曲課題の作品内容と作曲者に関する研究。演奏の訓練。ステージ演奏の心得。
- 第 14 回 自由曲テスト。
- 第 15 回 実技テスト内容の検討と次期課題の提示と解説

<電子オルガン> (辻本担当)

ロマン派以降の金管楽器、打楽器を積極的に活用したアンサンブル楽曲を素材に一年次前半からの楽器法、編曲法を継続して修得、演奏研究することで、あらゆる音楽現場にシなやかに対応する基礎と応用力を養う。下記の 3 点に主眼を置きながら、15 週の個人レッスンを進めていく。

- (1) 課題曲の編曲 (三段譜オルガン独奏用楽譜作成)
- (2) 各楽器奏法理解、オーケストレーション、アナリーゼ、鍵盤奏法研究
- (3) アンサンブル楽器としての実践研究

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
練習曲テスト、自由曲テスト (演奏時間 12 分以内の楽曲) の結果により評価する。

[4] 教 材

練習曲/ショパン (ヘンレ出版社) リスト (ブダペスト版) ドビュッシー (デュラン版)
モシュコフスキー (全音版)
自由曲/バロック、古典派、ロマン派 (ヘンレ原典版、ウィーン原典版)
シューマン (ブライトコプフ版) ショパン (パデレフスキー編集版、ヘンレ原典版)
ドビュッシー、ラヴェル (デュラン版) リスト (ブダペスト版)
プロコフィエフ、ラフマニノフ (ブージー&ホークス) 等

[5] 参考図書

ヘルマン・ケラー著『フレージングとアーティキュレーション』(音楽之友社)
エルネ・レンドヴァイ著『バルトークの作曲技法』(全音楽譜 1978)

鍵盤楽器 A III		担当教員	倉田佳代子・中野 研也・木下 由香 桂屋 京子・辻本 加代子	
授業の種類	単位数	配当学年・時期		必修・選択
実技	2 単位	2 年次前期		選択

[1] 授業のねらい

A I、A IIに引き続き演奏法の芸術的完成をめざす。特に、豊富な鑑賞機会を持ち、演奏の多様さを知り、演奏内容に関する自己の確立をめざす。同時に、古典派楽曲の課題研究により精深な程度における理解と高度な表現力を習得する。

[2] 授業の計画

授業はピアノと電子オルガンに分けてクラス別に行う。

<ピアノ> (倉田、中野、木下、桂屋担当)

(1) 演奏解釈、比較演奏論との関わりの中で、色彩豊かな表現力を習得する

(2) 課題曲研究 (ショパン、リスト、ドビュッシーの練習曲)

(3) 個人の能力に応じた演奏会用楽曲の研究と演奏法の実践

第 1 回～第 5 回 学習 a 個人の音楽性に適した作曲家とその作品を深く研究する。

学習 b 高度な演奏技法を習得させる。

近代ピアノ奏法・ペダルの現代技法等、ロマン派や印象派・近代の諸作品に対応する高度な演奏会用技法を習得する。

学習 c 自由課題の研究。楽曲分析、作品内容と作曲者に関する研究。

第 6 回 高度な演奏会用練習曲課題曲テスト。

第 7 回～第 13 回 学習 a～c の継続。

自己の音楽性との関わりにおいて自由曲課題の個性豊かな表現力を培う。

演奏の訓練。ステージ演奏の心得。

第 14 回 自由曲テスト。

第 15 回 実技テスト内容の検討と次期課題の提示と解説。

<電子オルガン> (辻本担当)

これまでに鍵盤楽器側から研究した管弦楽器法を基に、個人の音楽性に適した歴史的作品を選択して新しい電子楽器作品に編曲、演奏研究する中で、アコースティック楽器の歴史とクリエイティブ・サウンドのこれからを追求する。下記の 2 点に主眼を置きながら、15 週の個人レッスンを進めていく。

(1) 電子オルガンの機能を自ら駆使して、演奏会用課題楽曲の編曲と演奏研究

(2) アンサンブル楽器としての実践研究

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。

練習曲課題テスト、自由曲テスト (演奏時間 13 分以内の楽曲) の結果により評価する。

[4] 教 材

練習曲／ショパン (ヘンレ出版社) リスト (ブダペスト版) ドビュッシー (デュラン版)

自由曲／バロック、古典派、ロマン派 (ヘンレ原典版、ウィーン原典版)

シューマン (ブライトコプフ版) ショパン (パデレフスキー編集版、ヘンレ原典版)

ドビュッシー、ラヴェル (デュラン版) リスト (ブダペスト版)

プロコフィエフ、ラフマニノフ (ブージー&ホークス) 等

[5] 参考図書

K. U. シュナーベル著『ペダルの現代技法』(音楽之友社 1964)

ヨーゼフ・ディッヒラー著『ピアノの解釈と限界』(音楽之友社 1973)

鍵盤楽器 A IV		担当教員	倉田佳代子・中野 研也・木下 由香 桂屋 京子・辻本 加代子
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
実技	2 単位	2 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

4年間の研究の集大成としての演奏法の芸術的完成を行う。特にこの大学における音楽教育の学風と、個人の特性との融合により人間性豊かな演奏をめざす。

同時に、作曲家の生きた時代、地理的条件、社会条件、文化史的挿啓、民族、言語への理解と共感を持って演奏に臨む精神を作り上げていく。

[2] 授業の計画

授業はピアノと電子オルガンに分けてクラス別に行う。

<ピアノ> (倉田、中野、木下、桂屋担当)

(1) 古典派から現代音楽にいたる広いジャンルより適性をみて選択学修する。

第 1 回～第 8 回 学習 a 作品の概観。演奏家の手による演奏の比較検討。

学習 b 音楽史、作曲家の伝記、作風、楽曲構成等の調査学修。

学習 c 演奏技法の研究。自己の音楽的特性との関わりにおいて個性。豊かな表現力を行う。演奏の訓練。ステージ演奏の実施。

第 9 回 グループ別視聴研究演奏、意見交換。

第 10 回～第 13 回 学習 d 演奏についての最終チェック。暗譜の確認。

第 14 回 自由曲テスト。

第 15 回 実技テスト内容の検討と終了演奏会への心得の確認。

<電子オルガン> (辻本担当)

前半期に続き個人の音楽性に適した作曲家、作品を選択して編曲、演奏研究する。同時に、これまでの研究活動の集大成として自己のオリジナル作品の創作、演奏等について研究を行う。下記の 3 点に主眼を置きながら、15 週の個人レッスンを進めていく。

(1) 電子オルガンの機能を自ら駆使して、演奏会用課題楽曲の編曲と演奏研究

(2) アンサンブル楽器としての実践研究

(3) オリジナル作品の創作、演奏研究

[3] 評価の方

試験期間中の試験は実施しない。

自由曲テスト (演奏時間 13 分以内の楽曲) の結果により評価する。

[4] 教 材

自由曲／バロック、古典派、ロマン派 (ヘンレ原典版、ウィーン原典版)

シューマン (ブライトコプフ版) ショパン (パデレフスキー編集版、ヘンレ原典版)

ドビュッシー、ラヴェル (デュラン版)

[5] 参考図書

佐藤允彦著『ショパンとピアノ作品と』(東京音楽社 1991)

前田昭雄著『シューマニアーナ』(春秋社 1983)

大宮真琴著『スタイル・アナリシス』(音楽之友社 1988)

稲垣静一著『ロマン派ピアノ音楽の和声』(シオン出版社 1989)

ピーター・クーパー著・竹内ふみ子訳『ピアノの演奏様式』(シンフォニア 1987)

管楽器 A I		担当教員	おおくぼ こうじ 大久保 功治
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
実技	2 単位	1 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

管楽器の演奏法、及びその音楽表現の学習、研究を行うことを目的とする。A I においては、基本的奏法の確立と、その応用に主眼を置き、全 24 調にわたる基本的音階練習及び、全 24 調による中級程度の練習曲集について徹底した学習を行う。また、同時に全ての演奏表現の基本といえる古典派、バロック時代の楽曲の演奏を基礎として学習した後、ロマン楽派の楽曲の演奏を応用的に学習する。

[2] 授業の計画

主な学習計画は以下の通りであるが、個々の能力差を考慮し、柔軟性を持たせたプログラムを実施する。

- 第 1 回～第 2 回 全 24 調にわたる基本的な音階練習の徹底学習
(マルセル・モイーズ/17 のメカニズム日課大練習)
- 第 3 回～第 5 回 全 24 調にわたる中級程度の練習曲集と第 1 回から第 2 回の復習
(ベーム/24 の旋律的練習曲他)
- 第 6 回～第 10 回 合理的なブレスコントロールの学習とその確立と同時に第 1 回から第 5 回の応用練習を含める
- 第 11 回～第 15 回 合理的かつ柔軟性に豊んだテクニックの学習とその確立と同時に、ビブラートの基本と応用について

[3] 評価の方法

実技試験の結果を最重点として評価する。
欠席及び授業の妨げになる行為は減点の対象とする。

[4] 教 材

個々に合わせてその都度考慮する。

管楽器 A II		担当教員	おおくぼ こうじ 大久保 功治
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
実技	2 単位	1 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

管楽器の演奏法、及びその音楽表現の学習、研究を行うことを目的とする。A IIにおいては、A I で学習した演奏表現の応用に主眼を置き、全 24 調にわたるさらに難易度の高い音階練習及び全 24 調による中級・上級程度の練習曲について徹底学習する。また、同時に楽曲に関しては古典派バロック派の応用として、ロマン派、後期ロマン派、近代楽曲の総合的な学習、研究を行う。

[2] 授業の計画

主な学習計画は以下の通りであるが、個々の能力差を考慮し、柔軟性を持たせたプログラムを実施する。

- 第 1 回～第 2 回 全 24 調にわたる音階練習の基本と応用
(モイーズ/17 のメカニズム日課大練習・モイーズ/480 の音階と分散和音の練習)
- 第 3 回～第 4 回 全 24 調にわたる中級・上級程度の練習曲
(アルテス/第 3 巻他)
- 第 5 回～第 15 回 第 1 回～第 4 回に学んだことの応用練習と同時に、下記の事に留意しながら総合的に学んでいく。
- ・音色とビブラートの関連について
 - ・和声と音色の表現の関係について
 - ・指の敏捷性と柔軟性を得るための練習方法について
 - ・バロック音楽の即興性とその装飾音符について

[3] 評価の方法

実技試験の結果を最重点とするが、毎週の授業進度等を加味して評価する。欠席及び授業の妨げになる行為は減点の対象とする。

[4] 教 材

個々に合わせてその都度考慮する。

管 楽 器 A Ⅲ		担当教員	おおくぼ こうじ 大久保 功治
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
実技	2 単位	2 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

管楽器の演奏法、及びその音楽表現の学習、研究を行うことを目的とする。AⅢにおいては、AⅠ、AⅡで学習した演奏表現の集大成を行うとともに、全 24 調にわたるさらに高度でかつ漸進的な音階練習、近代和声法により作曲された上級の近代練習曲集に取り組んでいく。

また、AⅢにおいては、管楽器のための独奏曲のみにとどまらず、声楽及び弦楽分野の楽曲においても教材として取り上げ、管楽器の音表現の幅広い可能性についても学習、研究していく。

[2] 授業の計画

主な学習計画は以下の通りであるが、個々の能力差を考慮し、柔軟性を持たせたプログラムを実施する。

- 第 1 回～第 2 回 全 24 調にわたる漸新的練習曲集の学習
フェルステナウ／音の花束（24 の練習曲）Op. 15 他
- 第 3 回～第 4 回 調性感、和声感のある演奏へのアプローチ
- 第 5 回～第 7 回 時代・様式と音楽表現の関連性について
- 第 8 回～第 15 回 近代・現代のフルート作品にみられる新しい演奏法について

[3] 評価の方法

実技試験の結果を最重点とするが、毎週の授業進度等を加味して評価する。
欠席及び授業の妨げになる行為は減点の対象とする。

[4] 教 材

個々に合わせてその都度考慮する。

管楽器 A IV		担当教員	おおくぼ こうじ 大久保 功治
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
実技	2 単位	2 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

管楽器の演奏法、及びその音楽表現の学習、研究を行うことを目的とする。AIVにおいては、すでに学んだAⅠ～AⅢにおける演奏技術、音楽表現の応用と集大成を中心に、練習曲集に関しては近代和声法によるもの、十二音技法によるものなど高度な近代、現代練習曲集に挑戦していく。同時に、楽曲に関しては、独奏曲の他に、室内楽、オーケストラ等における管楽器の演奏技術・音楽表現についても学習研究していく。

[2] 授業の計画

主な学習計画は以下の通りであるが、個々の能力差を考慮し、柔軟性を持たせたプログラムを実施する。

- 第 1 回～第 4 回 上級技巧練習曲の学習
(フェルステナウ／練習曲 Op. 15 他)
- 第 5 回～第 9 回 近代様式に対応した練習曲の学習
(ジャンジャン／近代練習曲他)
- 第 10 回～第 11 回 フルート・アンサンブルの学習
- 第 12 回～第 13 回 オーケストラ・スタディの研究
- 第 14 回～第 15 回 現代フルート演奏法の学習

[3] 評価の方法

実技試験の結果を最重点とするが、毎週の授業進度等を加味して評価する。
欠席及び授業の妨げになる行為は減点の対象とする。

[4] 教 材

個々に合わせてその都度考慮する。

弦楽器 A I		担当教員	やました きんや 山下 金彌
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
実技	2 単位	1 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

弦楽器の演奏法及びその音楽表現の学習・研究を行うことを目的とする。

主な学習項目は次の通り。

- ① ボーイングの基本的原理の確認
- ② 合理的フィンガリングの学習
- ③ 全調にわたる基本的なスケール、アルペジオの学習
- ④ 古典派における楽曲（ソナタ・ソナチネ）の演奏法

[2] 授業の計画

- 第 1 回～第 2 回 ボーイングの基本的原理の確認とさらなるグレードアップを目指し、選曲をする。（セブシク Op. 3 のメソッドを導入）
- 第 3 回～第 4 回 ボーイングに関する一番重要な右腕の準備について（右肘の角度について）
- 第 5 回～第 6 回 左手の運指法の合理性に着手（合理的フィンガリングの学習のため、セブシク Op. 8 の併用）
- 第 7 回～第 8 回 音程とテンポの確認の上、テストに至る。
（全調にわたるスケールとアルペジオを多種類の運指にて）
- 第 9 回～第 10 回 自由曲テスト（7 月）を想定し、楽曲は古典から選択。
（全楽章の演奏ペースを考察）
- 第 11 回～第 12 回 暗譜の徹底とディナーミクとアゴーギクの確認。
（練習初期（譜読）より暗譜を）
- 第 13 回～第 15 回 伴奏付きレッスンでは、テンポ感を中心に各楽章とのバランスを考察。

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。

実技テストの結果を最重点として評価する。

欠席及び授業の妨げになる行為は減点の対象とする。

[4] 教 材

セブシク『セブシク・ヴァイオリン スタディス』Op. 1-1、Op. 8、Op. 3（ボスワース）
カール・フレッシュ『スケールシステム』（カール・フィッシャ）

弦楽器 A II		担当教員	やました きんや 山下 金彌
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
実技	2 単位	1 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

弦楽器の演奏法及びその音楽表現の学習・研究を行うことを目的とする。

主な学習項目は次の通り。

- ① 音楽表現とボーイングの関係
- ② 音楽表現とビブラートの関係
- ③ 柔軟性のあるフィンガリング法の学習
- ④ 全調にわたるスケール、アルペジオの応用学習
- ⑤ 古典派、ロマン派における楽曲（ソナタ・二重奏曲・室内楽曲）の演奏法

[2] 授業の計画

- 第 1 回～第 2 回 小品（楽曲的エチュード）テスト（10 月）を想定して選曲。
（音楽表現とボーイングとの考察）
- 第 3 回～第 4 回 表現上のビブラートとアクセントによる音色の開発。
- 第 5 回～第 6 回 表現上のディナーミクと音色の選択。アゴーギクの徹底。
- 第 7 回～第 8 回 伴奏付きレッスンでは、演奏効果を考察、奏法の選択を経てテストに至る。
- 第 9 回～第 10 回 自由曲テスト（1 月）を想定してロマン派楽曲の選曲。
（柔軟性のあるフィンガリングの実際性を考察）
- 第 11 回～第 12 回 全調にわたるスケール・アルペジオと 3 度、6 度、8 度の重音に取り組む。なお、スケールシステムには 4 度がないので他教材より取り入れること。
- 第 13 回～第 15 回 伴奏付きレッスンでは、アーティキュレーションやフィンガリングの確認をしてテストに至る。

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。

実技テストの結果を最重点として評価する。

欠席及び授業の妨げになる行為は減点の対象とする。

[4] 教 材

セブシク 『セブシク・ヴァイオリン スタディス』 0p. 8、0p. 3（ボスワース）

カール・フレッシュ 『スケールシステム』（カール・フィッシャ）

弦楽器 A Ⅲ		担当教員	やました きんや 山下 金彌
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
実技	2 単位	2 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

弦楽器の演奏法及びその音楽表現の学習・研究を行うことを目的とする。

主な学習項目は次の通り。

- ① ディナーミクとボーイングとの関係
- ② 純正調の学習
- ③ 室内楽曲の演奏／弦楽三重奏曲・弦楽四重奏曲・ピアノ三重奏曲
- ④ ロマン派楽曲（ソナタ・協奏曲等）の演奏法

[2] 授業の計画

- 第 1 回～第 2 回 マシンのメカニクと感性的なテクニックの連繋による選曲。
例：パガニーニ、ヴィニヤウスキ等のカプリース
- 第 3 回～第 4 回 エチュード（小品）のアーティキュレーションを指示指導。又、室内楽（弦楽器による）を考慮しつつ、純正調の音程とも取り組む。
（但し、ピアノとの平均率による音程も学習する）
例：ハイドン、メンデルスゾーン等のピアノ三重奏
- 第 5 回～第 6 回 ボーイングによるディナーミクの具体的な指導。平行して自由曲テスト（7 月）の選曲、譜読に入る。
- 第 7 回～第 8 回 パガニーニもヴィニヤウスキも各々、特有のボーイング奏法が確立されているので、アーティキュレーションをしっかりと把握すること。
- 第 9 回～第 10 回 自由曲テスト（7 月）は、後期の演奏研究や修了演奏も考慮の上選曲する。スケールの大きな選曲をして伴奏とのアンサンブルを学習。
例：フランク、ブラームス、ラヴェルのソナタ等
- 第 11 回～第 13 回 ピアノとのアンサンブルを最大に体験させるため、ピアノパートの把握を指導する。
- 第 14 回～第 15 回 テストでは、ピアノを全開にしてバランスを念頭に、十分な音量を維持し、スケールの大きな演奏を心がける。

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。

実技テストの結果を最重点として、自己練習の意欲を加味して評価する。

[4] 教 材

ガラミアン『ヴィニヤウスキー・カプリース』（インターナショナル・ミュージック社）
ガラミアン『パガニーニ・カプリース』（インターナショナル・ミュージック社）
ガラミアン『ローデ 24 カプリース』（インターナショナル・ミュージック社）

[5] 参考図書

カール・フレッシュ『ヴァイオリン奏法』（創元社）
ガラミアン『ヴァイオリン奏法と指導の原理』（音楽之友社）

弦楽器 A IV		担当教員	やました きんや 山下 金彌
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
実技	2 単位	2 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

弦楽器の演奏法及びその音楽表現の学習・研究を行うことを目的とする。

主な学習項目は次の通り。

- ① 旋律線とボーイングの関係
- ② オーケストラ・スタディの学習
- ③ ロマン派・近代楽曲（ソナタ・協奏曲）の演奏法
- ④ 4 弦の音楽的関連について／ガビニエの研究

[2] 授業の計画

- 第 1 回～第 2 回 演奏をするために、公開における演奏会を受講生に想定させながら、音楽・演奏面は勿論、主に運営全般に及ぶ諸問題を体験させる。（企画を側面から指導）
- 第 3 回～第 4 回 レッスンでは旋律ラインと音色の表現にボーイングの考察を加える。
- 第 5 回～第 6 回 レッスンを通してステージマナー、アンコール出入りなどの他に、演奏スタイルの連繫を指導。
- 第 7 回～第 8 回 レッスンでは、音色の表現としてビブラートの性格を取り上げ、叙情楽章の低音域について考察を加える。明確なアンサンブル技術の能力開発の演奏とする。
- 第 9 回～第 10 回 作品の背景研究とピアノパートの研究を促す。また、技術向上を目指し、ガビニエ著による四弦にわたるエチュードとヴィニヤウスキの LECOLE MODERANE を導入。
- 第 11 回～第 13 回 ロマン派・近代（ソナタ、協奏曲、小品）の演奏と奏法研究。
例：ブロッホ／ニグン、ラヴェル／ソナタ遺作、バルトーク／ルーマニア民族舞曲
- 第 14 回～第 15 回 録音と映像学習を併用する。ピアノ演奏（伴奏）の確認とアンサンブルの確認の上テスト。

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。

実技テストの結果を最重点として、自己練習の意欲を加味して評価する。

[4] 教 材

- ガラミアン『クロイツェル 42 エチュード』（インターナショナル・ミュージック社）
- ガラミアン『フィヨリロ 36 エチュード』（インターナショナル・ミュージック社）
- ガラミアン『ローデ 24 カプリース』（インターナショナル・ミュージック社）

[5] 参考図書

- カール・フレッシュ『ヴァイオリン奏法』（創元社）
- ガラミアン『ヴァイオリン奏法と指導の原理』（音楽之友社）

声楽 A I		担当教員	<small>きつひろみ くまだとみえ さかもとるみ</small> 木津裕美・熊田外美枝・坂本流美
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
実技	2単位	1年次前期	選択

[1] 授業のねらい

ヘンデル、ヴィヴァルディなどのバロック声楽曲及びそれ以前のダウラント、パーセル等古典声楽曲とヴェルディ、プッチーニ、レスピーギ等のイタリア近代声楽作品を比較演習する。

簡素で端正な様式の音楽でありながら特有の装飾技法を伴うバロック音楽の特性と発声法の関連を学ぶ一方で、近代歌曲作品に於ける自由なアゴーギクと呼吸法の関連を互いに対比させながら修練する過程で、時代背景と音楽様式の発展・変遷を探る。

[2] 授業の計画

前半はダウラント、バード、モンテヴェルディの作品からコンサート・ソングとリュート・ソングを、更にパーセル、バッハ、ヘンデルの作品からバスソ・オスティナート、カンタータ、アリア等歌曲の形式の変遷に触れる。

後半はイタリア近代オペラ作曲家／ヴェルディ、プッチーニ、マスカーニ等の歌曲作品を取り上げ、古典様式との表現の違いを比較演習する。

第 1 回～第 8 回 ダウラント、バード

- ・厳格な対位法
- ・快活な田園のリズム
- ・マドリカル形式
- ・舞曲のリズム
- ↓
- ・リュートとのかけあい

モンテヴェルディ、バッハ／カンタータ形式からヘンデル／アリアへ

第 9 回～第 15 回 ヴェルディ、プッチーニ、マスカーニ

- ・ベル・カント唱法の充分な発揮
- ・自由なアゴーギク表現
- ・雄弁なピアノ伴奏（オーケストラの輝き）

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。

研究発表により評価する。欠席は減点する。

[4] 教 材

- 『バード』『ダウラント』（ユニバーサル版）
- 『パーセル』（マスターズ・ミュージック版）
- 『モンテヴェルディ』（リコルディ版）
- 『バッハ』（ブライト・コップフ版）
- 『ヴェルディ』『プッチーニ』『マスカーニ』（全音版）

[5] 参考図書

関連の演奏例CDを授業の中で紹介。

声楽 A II		担当教員	きづひろみ くまだとみえ さかもとるみ 木津裕美・熊田外美枝・坂本流美
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
実技	2単位	1年次後期	選択

[1] 授業のねらい

山田耕筰以降の日本の近代作曲家の中から、主として中田喜直の歌曲をとり上げ、詩と作曲スタイルの違いを歌い分ける。その中で、日本語の発音と近代和声に融和する発声法、更にその音楽表現との関連を研究してゆく。

学習に際しては、より適正な日本語表現を実現するために詩の出典を探り、作詩の由来、詩人の系譜、作風まで研究して、詩の言葉が自分の言葉として表出できるよう修練する。その上で西洋近代和声の響きを表現するためのベル・カント発声法と、日本語表現の融和点を見出していく。

[2] 授業の計画

中田喜直／歌曲集「六つの子供の歌」他を題材として、詩の解釈を中心とした表現研究を進めてゆく。

第 1 回 歌曲集「六つの子供の歌」楽譜・演奏例等資料準備・対照。

第 2 回 詩と音域、学習目標の設定による研究対象曲の選出。

第 3 回～第 7 回 読譜と詩の背景研究／日本語ディクシオン、詩の出典、楽曲分析を踏まえた歌唱表現研究。

第 8 回～第 15 回 “未知の扉”、“サルビア”、“悲しくなったときは”、“さくら横町”等中田作品の代表的歌曲に題材を移して、詩の韻律による自由な語りと近代和声の響を踏まえた発声法、ピアノ伴奏法の研究。

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。

研究発表により評価する。欠席は減点する。

[4] 教 材

『中田喜直歌曲集』（音楽之友社）

[5] 参考図書

関連の演奏例 CD を授業の中で紹介。

声楽 A Ⅲ		担当教員	きづひろみ くまだとみ え さかもとる み 木津裕美・熊田外美枝・坂本流美
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
実技	2 単位	2 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

ロマン派時代にドイツリートとして飛躍的に発展して夥しい歌曲作品が開花した流れが近代に入ると、フランスを中心とした南ヨーロッパに舞台が広がることとなるため、ここではフランス歌曲とスペイン歌曲への入門編とする。主にフォーレの作品を通してフランス語特有の韻律と色彩感の表現を、また、グラナドスやオブラドルスの作品でスペイン語独自の発音とリズム感の表現を修練する。

[2] 授業の計画

第 1 回～第 10 回 G. フォーレの歌曲作品より「夢のあとに」、「リディア」、「月のひかり」、「マンドリン」を題材として下記の①～④の観点から研究を進める。

- ① フランス語の発音・詩の解釈
- ② 読譜とピアノ伴奏合わせ
- ③ 演奏例の鑑賞
- ④ 表現発表曲の選択

第 11 回～第 15 回 F. オブラドルスの「スペイン古典歌曲集」を題材として下記の①～④の観点から研究を進める。

- ① スペイン語の発音の特徴
- ② 詩の解釈
- ③ 演奏例の鑑賞
- ④ 表現発表曲の選択

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
研究発表により評価する。欠席は減点する。

[4] 教 材

G. フォーレ (仏アメル社出版)、F. オブラドルス (米インターナショナル社版)

[5] 参考図書

関連の演奏例 CD を授業の中で紹介。

声 楽 A IV		担当教員	きづひろみ くまだとみ え さかもとる み 木津裕美・熊田外美枝・坂本流美
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
実技	2 単位	2 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

専攻科 2 ヶ年の集大成として題材はオペラアリアを中心とする。

ロッシーニ、ベルリーニ、ドニゼッティ等イタリアロマン派から、プッチーニ、ヴェルディ等近代の作曲家の歌劇より各自の声質、演奏能力の段階に応じた内容のアリアを選択し、これまでに修得した表現力を駆使してその人物像に自己の個性を重ね合わせ、発声とキャラクター表現の相互関連を研究する。

[2] 授業の計画

- 第 1 回～第 2 回 主として、イタリアロマン派以降の作曲家／ロッシーニ、ドニゼッティ、ベルリーニ、プッチーニ、ヴェルディ等の歌劇作品の中から、各自の声質と学習段階に適したアリアを選曲
- 第 3 回～第 8 回 歌劇の全体像とアリアの背景となる場面の把握
アリア表現と人物像／発声とキャラクター表出の関連
- 第 9 回～第 11 回 関連作曲家の歌曲作品研究
- 第 12 回～第 15 回 修了演奏会での発表を前提としたステージ表現の研究

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。

研究発表により評価する。欠席は減点する。

[4] 教 材

リコルディ版

[5] 参考図書

関連の演奏例 CD を授業の中で紹介。

[6] そ の 他

「修了演奏会」での公開演奏を念頭にして、頻繁な録音学習を深め、合わせて授業の課程で適切なステージマナーも培ってゆくこととする。

声 楽 B I		担当教員	つばたのぶこ まつはまとしろう くまだとみえ きづひろみ 坪田信子・松濱敏郎・熊田外美枝・木津裕美	
授業の種類	単位数	配当学年・時期		必修・選択
演習	2 単位	1 年次通年		選択

[1] 授業のねらい

声楽副科授業として行う。発声法の基本並びにイタリア古典歌曲の歌唱法の修得を土台として、それらの様々の伴奏法等をも通して養ってきた“歌心”の探求を一層深めるとともに、更に豊かに発展させていく。題材をイタリアロマン派作品（ベルリーニ、ロッシーニ等）から近代派作品（ドナウディ、マスカーニ等）にまで広げる一方で日本歌曲も重視し、その歌い方の基本も演習する。

[2] 授業の計画

授業は4名の教員がクラス別に担当する。

〈前期〉 日本歌曲の表現研究

第 1 回～第 5 回 山田耕筰「この道」「からたちの花」「待ちぼうけ」「かやの木山の」

第 6 回～第 8 回 平井康三郎「ゆりかご」「ふるさとの」「びいでびいで」

第 9 回～第 15 回 中田喜直「夏の思い出」「たあんきぼーんき」「むこうむこう」

「さくら横ちょう」

〈後期〉 イタリア・ロマン派、近代歌曲の表現

第 16 回～第 20 回 ベルリーニ「三つのアリエッタ」「六つのアリエッタ」より

第 21 回～第 25 回 ロッシーニ「音楽の夜会 8 曲」より

第 26 回～第 30 回 ドナウディ「36 の古典様式によるアリア集」

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。

表現発表により評価する。欠席は減点する。

[4] 教 材

前期／音楽塾

各作曲家共にリコルディ版

[5] 参考図書

関連の演奏例CDを授業の中で紹介。

声楽 B II		担当教員	つばたのぶこ まつはまとしろう くまだとみえ きづひろみ 坪田信子・松濱敏郎・熊田外美枝・木津裕美	
授業の種類	単位数	配当学年・時期		必修・選択
演習	2 単位	2 年次通年		選択

[1] 授業のねらい

声楽副科授業として行う。IIでは、Iで学習した日本歌曲とイタリア（ロマン派、近代）歌曲の次に題材をドイツリートに移し、より安定して確立された発声法を土台として、ドイツ語のディクシオン（正しい発音、発声による音読練習）、ドイツロマン派の詩と詩人の背景研究、ピアノ伴奏と発声・音色の関連の探求などを行う。

[2] 授業の計画

授業は4名の教員がクラス別に担当する。

モーツァルト、シューベルト、ブラームス、シューマンのリート作品より取り上げた2つの典型形式（有節歌曲と通作歌曲）を題材として、次の観点から学習を進める。

- ① ディクシオン練習（発音・音読）
- ② 詩の解釈（ドイツの風土と歴史の理解）
- ③ ピアノ伴奏の役割（リート表現上のアンサンブル法）

第 1 回～第 15 回 有節歌曲の研究

モーツァルト 「Sehnsucht nach Frühling」

シューベルト 「Ave Maria」

ブラームス 「Wiegenlied」

シューマン 「Weit, Weit」

第 16 回～第 30 回 通作歌曲の研究

モーツァルト 「Das Veilchen」

シューベルト 「Ganymed」

ブラームス 「Immer leiser wird mein Schlummer」

シューマン 「Die Lotosblume」

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。

研究発表により評価する。欠席は減点する。

[4] 教 材

ペータース版による各作曲家の作品

[5] 参考図書

関連の演奏例CDを授業の中で紹介。

鍵盤楽器 B I		担当教員	倉田佳代子・中野研也・木下 由香
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2 単位	1 年次通年	選択

[1] 授業のねらい

声楽・管弦専攻生のためのピアノ副科実技として行う。バロック・古典派におけるピアノ作品の演奏を通して、音楽の構造美、機能的和声法等を学習し、基本的な音楽能力の育成を目指す。

バロック時代の楽曲（J. S. バッハ／2声インヴェンション、3声シンフォニア、平均律ピアノ曲集、スカルラッチィ／ソナタ等）を教材として学習し、対位的演奏表現に触れる。同時に古典派のピアノ作品（ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン／ピアノ・ソナタ等）の演奏を通して、音楽構造美及び旋律美について感得・学習させる。

[2] 授業の計画

授業は2名の教員がクラス別に担当する。

第1回～第2回 個人別能力診断、個人別課題提示、テキストの指定。

第3回～第6回 バッハ研究。2声インヴェンション、3声シンフォニアの音楽内容の十分な理解と演奏表現。

第7回～第10回 ソナタ形式の楽曲構造の分析。主題の音楽的性格の把握。動機の研究。

第11回～第14回 平均律ピアノ曲集のプレリュードの多様な音楽的性格および、フーガの構造理解とその表現。

第15回 まとめ

第16回～第18回 対位法楽曲の基礎知識の確認と整理。バッハの装飾音の研究。終止形の確認。楽曲の段落部分（楽句、楽節）の発見。

第19回～第20回 主題動機の読み取り方。対旋律の演奏技法としての扱い方。

第21回～第22回 ソナタ形式の主題の異なった性格表現についての基礎知識の教授。

第21回～第22回 ソナタの展開の演奏技法。ハーモニーの知識の演奏への応用について。

第25回～第26回 3声部の演奏技法。掛留音の正確な奏法。カンタービル奏法の習熟。レガート、ノンレガートの演奏技法。

第27回～第29回 ソナタ形式の再考。古典派作曲家のスタイルの特質。緩徐楽章、メヌエット、スケルツォ、ロンド等終楽章（フィナーレ）の研究。

第30回 まとめ

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。

前期1回、後期1回 計2回により評価する。欠席は減点する。

[4] 教材

ヘンレ出版社・原典版／音楽之友社・ウィーン原典版

バッハ 2声インヴェンション、3声シンフォニア、平均律

ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン ソナタ集

鍵盤楽器BⅡ		担当教員	くらたかよこ なかのけんや きのした ゆか 倉田佳代子・中野研也・木下 由香
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2単位	2年次通年	選択

[1] 授業のねらい

声楽・管弦専攻生のためのピアノ副科実技として行う。ロマン派音楽作品の全般的な特徴である、色彩的なハーモニーや情感の溢れた旋律美について感得・学習させる。

ロマン派音楽、特にシューベルト、ショパンのピアノ作品を教材とする。平易なワルツ、アンプロンプチュ、ポロネーズ等の作品の色彩豊かなハーモニーや旋律の美しさを感じ、表現する力を養う。

[2] 授業の計画

授業は2名の教員がクラス別に担当する。

第1回～第2回 個人別能力診断、個人別課題提示、テキストの指定。

第3回～第6回 シューベルトの作品研究。アンプロンプチュの多様な音楽的性格の把握。

第7回～第10回 シューベルトの作品研究。ソナタ形式の楽曲構造の分析。主題の音楽的性格の把握。動機の研究。

第11回～第14回 シューベルトのアンプロンプチュ、ソナタの再考。作曲者に関する研究。テストにむけて暗読演奏の訓練。

第15回 まとめ

第16回～第18回 ショパンの作品研究。ワルツの多様な音楽的性格の把握。

第19回～第21回 ショパンのワルツを教材として、ロマン派音楽作品の全般的な特徴を把握。

第22回～第24回 ショパンのアンプロンプチュの多様な音楽的性格の把握。

第25回～第27回 ショパンのアンプロンプチュを教材として、ロマン派音楽の特徴である、色彩的なハーモニーや情感の溢れた旋律美について研究。

第28回～第29回 ショパンのワルツ、アンプロンプチュを再考。作曲者に関する研究。テストにむけて暗読演奏の訓練。

第30回 まとめ

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。

前期1回、後期1回 計2回の実技により評価する。欠席は減点する。

[4] 教材

シューベルト：ヘンレ出版社・原典版／音楽之友社・ウィーン原典版

ショパン：パデレフスキー版

管弦合奏 I		担当教員	おおくぼ こうじ 大久保 功治
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2 単位	1 年次通年	選択

[1] 授業のねらい

室内乐的要素を持つ管弦楽曲を教材に用いてアンサンブルの学習を行う。
独奏とは異なる音楽形式を通して、楽曲の構成と演奏の様式に視点をおき、音楽表現のより深い技法を体験していく。管弦合奏 I では、主としてバロック時代を中心に作曲された楽曲を取り上げ、多声音楽の様式感を学習していく。

[2] 授業の計画

第 1 回～第 7 回 管弦合奏用にアレンジされた親しみやすい名曲を教材に取り上げ、下記に留意しながら管弦合奏の基本を学習する。

- ・ 正確な譜読み
- ・ 正確な音程づくり
- ・ テンポやリズムを合わせる
- ・ アーテュキレーションの統一
- ・ 弦楽器（ボーイング）、管楽器（ブレス）の演奏技法の統一
- ・ 楽曲のアナリゼを行う
- ・ 指揮者とのコミュニケーション

第 8 回～第 15 回 バッハ、コレルリやテレマンなどバロック時代の作品の取り上げ、多声音楽の表現方法を学びながら、楽曲の構成を研究し、合奏をより深く理解していく。第 1 週から第 7 週に学んだことに加え、以下についてもさらに留意して学習を進めていく。

- ・ 個々のアゴーギク、ディナーミックが合奏全体に統一された動きになるよう心がける。
- ・ 弦楽器と管楽器の音量バランス。
- ・ 作曲家の意図は何かを知る。
- ・ 合奏体としての音色づくりに磨きをかける。
- ・ 作曲家、指揮者、演奏者が一体となった統一感ある演奏表現を目指す。

第 16 回 演奏会（発表会）を企画し、それに向けた選曲及び、運営方法などを決定する。

第 17 回～第 28 回 前期に学習した事柄について繰り返し学習しながら、演奏会に向けての練習を行う。また、以下の 2 点についても加えて学習する。

- ・ 鑑賞／演奏する楽曲を含め、作曲者の他の作品の CD や演奏会の映像等を鑑賞する。
- ・ 録音／自分たちの演奏を録音し、客観的な演奏の流れを知る。

第 29 回 リハーサルを行い、会場にあった響き、音色の作り方を学習する。

第 30 回 発表会を行う。

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
発表会での演奏の仕上がりを評価する。
欠席及び授業の妨げになる行為は減点の対象とする。

[4] 教 材

受講生のバランスにあった編成の楽曲をその都度選曲し、教材とする。

管弦合奏Ⅱ		担当教員	おおくぼ こうじ 大久保 功治
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2単位	2年次通年	選択

[1] 授業のねらい

管弦合奏Ⅱにおい手は、管弦合奏Ⅰで学んだことに基礎をおきながら、主として古典時代の楽曲を中心に教材として取り上げ、ソナタ形式を主軸に完成されて行った古典派の音楽様式に触れながら、豊かで変化にとんだ和声法や音楽表現を体験して行く。

[2] 授業の計画

第1回～第7回 ハイドン、モーツァルト、ベートーベン等の古典楽派の室内楽曲を教材に取り上げ下記に留意しながら管弦合奏の基本を学習する。

- ・正確な譜読み
- ・正確な音程づくり
- ・テンポやリズムを合わせる
- ・アーテュキレーションの統一
- ・弦楽器（ボーイング）、管楽器（ブレス）の演奏技法の統一
- ・楽曲のアナリゼを行う
- ・転調に対する感覚を養う
- ・指揮者とのコミュニケーション

第8回～第15回 さらに高度な楽曲に取り組み、管弦楽の豊かな音楽表現に触れながら、管弦楽法の基礎、楽曲の構成、和声法などについて研究し、合奏をより深く理解していく。第1週から第7週に学んだことに加え、以下についてもさらに留意して学習を進めていく。

- ・個々のアゴーギク、ディナーミックが合奏全体に統一された動きになるよう心がける。
- ・弦楽器と管楽器の音量バランス。
- ・作曲家の意図は何かを知る。
- ・合奏体としての音色づくりに磨きをかける。
- ・作曲家、指揮者、演奏者が一体となった統一感ある演奏表現を目指す。

第16回 演奏会（発表会）を企画し、それに向けた選曲及び運営方法などを決定する。

第17回～第28回 前期に学習した事柄について繰り返し学習しながら、演奏会に向けての練習を行う。また、以下の2点についても加えて学習する。

- ・鑑賞／演奏する楽曲を含め、作曲者の他の作品のCDや演奏会の映像等を鑑賞する。
- ・録音／自分たちの演奏を録音し、客観的な演奏の流れを知る。

第29回 リハーサルを行い、会場にあった響き、音色の作り方を学習する。

第30回 発表会を行う。

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。

定期的に行う演奏会を評価する。欠席及び授業の妨げになる行為は減点の対象とする。

[4] 教 材

受講生のバランスにあった編成の楽曲をその都度選曲し、教材とする。

ヨーロッパの近代美術		担当教員	いまい ゆうこ 今井 祐子
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2単位	1年次後期	選択

[1] 授業のねらい

この授業では、フランスの絵画と装飾美術を中心に代表的な作品の造形・主題およびその制作者の個性を確認していきながら、近代ヨーロッパ美術の流れを概観する。

19世紀フランス美術は、様々な様式の誕生によって他のヨーロッパ諸国を圧倒する展開を見せたが、授業ではその変遷と個々の作品、および当時のヨーロッパにおける日本へのまなざしについての理解を深めていく。

[2] 授業の計画

I アカデミーと絵画

第1回 新古典主義——ダビッド、アングル

第2回 ロマン主義——ジェリコー、ドラクロワ

第3回 近代風景画の発展——カンスタブル、バルビゾン派

第4回 美術とスキャンダル——クールベ、マネ

II 印象派とジャポニスム

第5回 印象派の誕生

第6回 ジャポネズリーとジャポニスム

第7回 浮世絵との出会い①——ドガ

第8回 浮世絵との出会い②——モネ

第9回 印象派以後——スーラ、セザンヌ

III 世紀末美術と装飾美術

第10回 象徴主義——モロー、ルドン

第11回 アーツ・アンド・クラフツ運動

第12回 陶磁器のジャポニスム

第13回 アール・ヌーヴォー①——ブリュッセル、パリ

第14回 アール・ヌーヴォー②——ナンシー

第15回 まとめ

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を実施する。

試験（期末、プリントやノートの持ち込み可）により評価する。

欠席及び授業の妨げになる行為は減点の対象とする。

[4] 参考図書

『西洋美術館』（小学館 1999）

『印象派美術館』（小学館 2004）

『ジャポニスム入門』（思文閣出版 2000） など

基礎イタリア語		担当教員	ばんどう まりこ 伴藤 眞理子
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2 単位	1 年次通年	選択

[1] 授業のねらい

楽譜に使用されている速度や表現上の指示を表す発想用語は、その殆どがイタリア語である。本授業では、イタリア語の基礎文法を正しく学び理解する事で、自ら音楽用語の語源や歌詞の意味を論理的に把握出来るよう導きたい。将来、一人一人の音楽解釈の幅が広がり、又感じ方も多様性が増して音楽への更なる理解が深まることを期待し、イタリア語に対する親近感を育てながら楽しく授業を進めていく。

[2] 授業の計画

- 第 1 回～第 2 回 イタリア語の読み方（アルファベット）／辞書と文法書の使い方
- 第 3 回～第 5 回 名詞の性と数／形容詞
- 第 6 回～第 8 回 主語人称代名詞と動詞の活用（現在形）
- 第 9 回～第 11 回 所有形容詞と目的語
- 第 12 回～第 14 回 直接法近過去
- 第 15 回～第 16 回 直説法半過去
- 第 17 回～第 18 回 未来形
- 第 19 回～第 22 回 受動態と関係代名詞
- 第 23 回 条件法／ジェルンディオ
- 第 24 回～第 25 回 接続法現在／過去
- 第 26 回～第 27 回 接続法半過去／大過去
- 第 28 回～第 29 回 直説法遠過去
- 第 30 回 総まとめ（音楽用語は文法に即して説明して行く）

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を行う。
試験 100 点。欠席及び授業の妨げになる行為は減点する。

[4] 教 材

白崎容子著『らくらくマスターイタリア語』〈教科用〉（郁文堂 2010 年 4 月 1 日初版発行）
伊和／和伊辞典（特に指定しない。オリエンテーションで数点紹介する。）

[5] 参考図書

授業の進行に応じて紹介する。

[6] その他

授業を妨害する学生には厳重に注意する。注意しても聞き入れられない場合は、退出してもらおう。

音楽表現研究		担当教員	いちはし ゆみこ 市橋 優美子
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	2 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

文章の読解力や作成力は、将来音楽に従事する者にも必ず要求される能力である。本授業では実践的な訓練を通じた文章能力全般の向上を目的とする。まず前半の授業では、曲目解説、演奏会評、研究論文など音楽について書かれた様々な種類の文章を取り上げ、様々な文体や書式に親しみながら読解の方法を習得する。後半では、テーマの設定、資料の収集と整理、書式、構成と論旨の展開、推敲など、文章を作成するための手順と方法を学び、最終的に音楽に関する完成された文章を作成する。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 音楽に関する文章を書くためのガイダンス、音楽を言葉で表現する訓練
- 第 2 回 K J 法の理論と実践
- 第 3 回 基本文献・資料の探し方と表記法 1
- 第 4 回 基本文献・資料の探し方と表記法 2
- 第 5 回 研究課題の設定、原稿用紙の書き方、新聞記事を読む 1
- 第 6 回 論文を読む 1～読解、分析、批判、自己の見解の形成～
- 第 7 回 Word による文書作成
- 第 8 回 Power Point による資料作成
- 第 9 回 論文を読む 2～読解、分析、批判、自己の見解の形成～
- 第 10 回～第 14 回 プレゼンテーションの理論と実践
- 第 15 回 小論文作成

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
小課題と期末課題により評価する。欠席及び授業の妨げになる行為は減点する。

[4] 教 材

プリント教材を適宜配布する。
村田千尋著『音楽の思考術－より深く音楽を知るための実践的技法－』
(音楽之友社 2000)

演奏特修		担当教員	大久保功治・倉田佳代子・坪田 信子 山下 金彌
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2 単位	1 年次通年	必修

[1] 授業のねらい

すでに学んだ音楽理論、音楽史、和声学、楽器演奏法等の理論を背景に、各個人の能力、経験の深さに応じた音楽表現を模索し、音楽家としての演奏能力の育成に主眼を置く。

器楽・声楽分野の学生は、学習成果の発表として学内における公開の「演奏特修」演奏会に出演する。

音楽療法士（1 種）称号の取得を目指す学生は、公開演奏の代わりに音楽療法に関する論文を作成し、論文中間発表を行うことができる。

[2] 授業の計画

授業では、年度末における学習成果発表の場として行う公開演奏会を目標に、下記に掲げるそれぞれの項目に充分留意しながら、音楽指導を行う。これらの指導は鍵盤楽器、管楽器、弦楽器、声楽の異なる4つの表現分野に分かれてクラス別に行う。同時に受講生は、年間を通じて開催される数回の学内における各種の「学内演奏会」に出席して、他の学生の演奏を鑑賞し、そのレポートを提出することも義務付けられている。

〈鍵盤楽器の分野〉（倉田担当分）

- ① 鍵盤楽器の演奏表現と他の楽器の演奏表現の比較・演習
- ② ステージにおける“響き”の研究／ピアノのタッチとペダリングの関係
- ③ 機能と声に支えられた旋律の歌い方
- ④ 室内楽曲におけるピアノパートの効果的演奏法

〈管楽器の分野〉（大久保担当分）

- ① 管楽器の演奏表現と他の楽器の演奏表現の比較・演習
- ② 演奏会場における“響き”の研究／息のスピードとビブラートの関連
- ③ 生命感溢れる旋律の歌い方／自然な息を使った表現方法
- ④ 楽曲のイメージ作り／室内楽作品のオーケストレーション

〈弦楽器の分野〉（山下担当分）

- ① 弦楽器の演奏表現と他の楽器の演奏表現の比較・演習
- ② 演奏会場における“響き”の研究／弓のスピードとビブラートの関連
- ③ 生命感溢れる旋律の歌い方／ボーイングによる具体的表現方法
- ④ アンサンブルとしての楽曲表現

〈声楽の分野〉（坪田担当分）

- ① 声楽の演奏表現と他の楽器の演奏表現の比較・演習
- ② 演奏会場における効果的な発声法の研究
- ③ 自然な呼吸法と旋律線の関連
- ④ 器楽作品に現れた“歌”の表現方法

[3] 評価の方法

公開演奏会における演奏を第一の評価とする。さらに、鑑賞した「学内演奏会」のレポートの内容を加味する。詳細は、「音楽学科履修の手引き 2005」を参照のこと。

[4] 教 材

個々の受講生の能力、経験の深さに応じた楽曲を選び、教材とする。

修了演奏		担当教員	大久保 功治・倉田 佳代子・坪田 信子 山下 金彌
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2 単位	2 年次通年	必修

[1] 授業のねらい

- ★器楽・声楽分野の学生にとって、本授業は1年次の「演奏特修」の延長として位置づけられ、音楽家としてのさらに深い演奏能力の育成を目指すものである。また、専攻科における学習の締めくくり及び、学習成果発表の場として公開での修了演奏会（学内）を行う。
- ★音楽療法士（1種）称号の取得を目指す学生は、公開演奏の代わりに音楽療法に関する論文を作成し、公開論文発表を行うことができる。

[2] 授業の計画

授業では、年度末における修了演奏会を目標に、下記に掲げるそれぞれの項目に留意しながら、音楽指導を行う。これらの指導は、鍵盤楽器、管楽器、弦楽器、声楽の異なる4つの表現分野に分かれてクラス別に行う。また、音楽療法コースの学生については、各自の研究テーマに沿った論文の発表を行う。これに対しては、指導教員とのスーパーヴィジョンを通して指導が展開される。同時に受講生は、年間を通じて開催される数回の学内演奏における各種の「学生演奏会」に出席して、他の学生の演奏を鑑賞し、そのレポートを提出することも義務付けられている。

＜鍵盤楽器の分野＞（倉田担当分）

- ・鍵盤楽器の演奏表現と他の楽器の演奏表現の比較・演習
- ・演奏会場における“響き”の研究
- ・室内楽曲におけるピアノパートの効果的演奏法

＜管楽器の分野＞（大久保担当分）

- ・管楽器の演奏表現と他の楽器の演奏表現の比較・演習
- ・演奏会場における“響き”の研究
- ・生命感溢れる旋律の歌い方

＜弦楽器の分野＞（山下担当分）

- ・弦楽器の演奏表現と他の楽器の演奏表現の比較・演習
- ・演奏会場における“響き”の研究
- ・生命感溢れる旋律の歌い方

＜声楽の分野＞（坪田担当分）

- ・声楽の演奏表現と他の楽器の演奏表現の比較・演習
- ・演奏会場における効果的な発声法の研究
- ・器楽アンサンブルを伴う“歌”の表現技法

[3] 評価の方法

修了演奏会における演奏及び、公開論文発表会における内容を第一の評価とする。さらに、鑑賞した「学生演奏会」のレポートの内容を加味する。

[4] 教 材

演奏分野：個々の受講生の能力、経験の深さに応じた楽曲を選び、教材とする。
音楽療法分野：研究内容にあった文献をその都度提示する。

教育原理		担当教員	ますだ 増田	つばさ 翼
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択	
講義	2単位	2年次前期	選択	

[1] 授業の目的・ねらい、概要、到達目標

本講義では、「教育」の意義と目的、人間の成長発達に対する遺伝と環境の影響、日本とは異なる文化・社会の中で育つ子どもの姿、生涯学習社会の進展、現代のユニークな学校、教育理論の歴史、西洋と日本の子ども観、教育制度の変遷など、現代の教育に関わる基礎的な事項について学ぶ。基礎的な事項についての知識・理解を得るとともに、現代の教育に関わる問題について、自分で考える力を身につけてもらいたい。

[2] 授業の計画

- 第 1回 オリエンテーション
- 第 2回 保育における教育原理
- 第 3回 教育の意義と目的：教育の社会的役割
- 第 4回 人間の発達と教育 ①遺伝か環境か
- 第 5回 人間の発達と教育 ②文化と社会化
- 第 6回 生涯学習社会における教育 ①生涯学習とは
- 第 7回 生涯学習社会における教育 ②成人期の学習
- 第 8回 現代のユニークな学校と教育方法 ①シュタイナー学校
- 第 9回 現代のユニークな学校と教育方法 ②学びの共同体
- 第 10回 教育理論の歴史 ①コメニウス、ロック、ルソー、ペスタロッチ
- 第 11回 教育理論の歴史 ②デューイと新教育運動
- 第 12回 子ども観と教育観の変遷 ①西洋
- 第 13回 子ども観と教育観の変遷 ②日本
- 第 14回 教育制度の変遷
- 第 15回 現代の教育課題・まとめ

[3] 評価の方法

試験は行わず、ノート等の提出物（50%）とレポート（50%）で評価する。
欠席、遅刻、早退および授業進行の妨げになる行為は減点する。

[4] 教 材

改訂・保育士養成講座編纂委員会編『教育原理』（全国社会福祉協議会 2009）
その他、適宜プリント資料を配布する。

[5] 参考図書

江原武一・山崎高哉編『基礎教育学』（放送大学教育振興会 2007）
荒井聡史・今村光章・渡辺嗟恵子編『共に育ちあう保育を求めて』（みらい 2003）
佐藤学『学校の挑戦—学びの共同体を創る—』（小学館 2006）
その他、講義中に適宜、紹介する。

[6] その他

私語をする学生に対しては、とりわけ厳しく指導し減点する。。また、初回到座席を指定する。

子どもの保健 I		担当教員	さいとう まさかず 齋藤 正一
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	4 単位	1 年次通年	選択

[1] 授業の目的・ねらい、概要、到達目標

子どもの「こころとからだ」について話します。子どもと成人との違いを理解することがたいせつで、そのキーワードは「成長と発達」です。生まれる前から始まり成人に至るまでの心身の変化と身体各部の様子から、生活全般、病気や事故、日常生活から異常事態まで幅広い範囲にわたり、さらに子どもをとりまく社会的背景などについても解説します。受講者の皆さんはこれから育児・保育・教育・介護など、さまざまな機会に子どもやその保護者の人たちと接する機会が増えることでしょう。そういったときに役に立つと思われる知識や情報を提供するがこの授業のねらいです。

[2] 授業の計画

- | | |
|--------------------|------------------------|
| 1. 小児保健の基礎知識と成長・発達 | 16. 小児健康障害の概括 |
| 2. 発生・受精・胎内生活 | 17. 事故とトラブル |
| 3. 胎内での発育 | 18. 応急処置・救急処置 |
| 4. 発育の概要 | 19. 新生児の概要 |
| 5. 乳児、幼児、学童期、思春期 | 20. 正常の新生児 |
| 6. 成長のさま（骨や歯の成長） | 21. 未熟児・病的新生児 |
| 7. 成長の評価 | 22. 周産期障害 |
| 8. 発達の概要 | 23. 感染と感染性症 |
| 9. 運動の発達 | 24. 感染症の実例 |
| 10. 知覚・言語の発達 | 25. 感染の防止と対策 |
| 11. 自我と社会性 | 26. 神経疾患 |
| 12. 知能と発達の評価 | 27. アレルギー性疾患 |
| 13. 小児期の栄養と乳栄養 | 28. 小児特有の疾患（川崎病・腸重積など） |
| 14. 小児期の生活（概説） | 29. 虐待・委託保育・母子保健行政など |
| 15. 前半のまとめ | 30. 後半のまとめ |

[3] 評価の方法

前後期とも試験期間中に筆記試験（各 50 点満点）を行い、その合計点で評価する。正当な理由なしに遅刻・欠席が度重なるときは減点対象とします。前期後期とも最後の授業では、まとめと復習に加え、試験の案内もします。

[4] 教 材

今村栄一・巷野悟郎（編著）「新・小児保健 13 版」（診断と治療社 2010 年）

[5] 参考図書

必要に応じて講義中に紹介する。

[5] その他

前期のみ・後期のみの受講は不可。授業には教科書・スライドと、毎回配布するプリント（A4 サイズ）を使います。プリントがないと授業は理解できず、復習もできません。先に配布したプリントを後の講義で参照することもあるので、既に配布したものを含めて毎回持参するように。欠席等でプリントを貰いそびれた人にはバックナンバーを用意します。前期後期あわせて 40 枚程度になるので、ファイルフォルダー（A4 サイズ）を準備しておくとう便利です。

発達心理学Ⅱ		担当教員	おとべ たかゆき 乙部 貴幸
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	1 年次後期	選択

[1] 授業の目的・ねらい、概要、到達目標

保育所・幼稚園・認定こども園などにおける子どもの発達を援助するために、(1)子どもの心身の発達、(2)生活と遊びを通して学ぶ子どもの経験や学習の過程の理解を通して、保育の実践と発達援助について考察して欲しい。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 新生児期～0 歳前半の運動発達
- 第 2 回 新生児期～0 歳前半の認知発達
- 第 3 回 0 歳後半の運動発達
- 第 4 回 0 歳後半の認知発達
- 第 5 回 乳児研究の最前線
(第 1 回～第 4 回の小テスト)
- 第 6 回 1～2 歳の運動発達
- 第 7 回 1～2 歳の認知発達
- 第 8 回 2～3 歳の運動発達
- 第 9 回 2～3 歳の認知発達
(第 6 回～第 9 回の小テスト)
- 第 10 回 数量概念の発達
- 第 11 回 「物語る」能力と読み書きの発達
- 第 12 回 遊びの発達とメディア
- 第 13 回 友達関係の発達と他者の心の理解
- 第 14 回 道徳性と自己制御、向社会的行動の発達
- 第 15 回 発達をつまづきと保・幼・小連携
(第 10 回～第 14 回の小テスト)

[3] 評価の方法

試験は小テスト 3 回、期末試験 1 回の計 4 回行う。期末試験は試験期間中に行う。小テスト (30%)、期末試験 (50%)、授業時に課す課題 (20%) により総合的に評価する。() 内は、評価にしめる比重を表す。欠席・遅刻・早退、および著しく受講態度が悪い場合は減点する。

[4] 教 材

必要に応じて教員がプリントを配布する。さらに、以下の 2 冊を所持しておくこと。
厚生労働省『保育所保育指針解説書』(厚生労働省, 2008)
文部科学省『幼稚園教育要領解説』(フレーベル館 2008)

[5] 参考図書

無藤隆・岩立京子 (編)『乳幼児心理学』(北大路書房 2009)
多鹿秀継・南憲治 (編)『児童心理学の最先端』(あいり出版 2009)
谷田貝公昭・高橋弥生『データでみる幼児の基本的な生活習慣』(一藝社 2009)
若井邦夫・高橋道子・高橋義信『グラフィック乳幼児心理学』(サイエンス社 2006)

発達心理学Ⅲ		担当教員	みわ 三和	まさる 優
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択	
演習	2単位	2年次後期	選択	

[1] 授業の目的・ねらい、概要、到達目標

発達心理学Ⅰで学習した内容をさらに深化し、その範囲の拡大をめざします。思春期・青年期の発達のすじみちや臨床、現代的な問題、子どもから大人への移行期の心の揺れ、成人・老人期に関わる事項について学習します。授業では、心理テストを行って自己分析を試みたり、発表と討論などを通して青年期におけるアイデンティ確立について体験的に学習します。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 青年期へのアプローチ
- 第 2 回 自己形成のすじみち
- 第 3 回 認知の発達
- 第 4 回 家族の中の青年
- 第 5 回 学校のなかの青年
- 第 6 回 地域に育まれる青年
- 第 7 回 就職と労働
- 第 8 回 青年期と非行
- 第 9 回 ひきこもる青年とその対応
- 第 10 回 青年期と性
- 第 11 回 歴史の中の青年
- 第 12 回 青年を理解する方法
- 第 13 回 成人期の理解
- 第 14 回 老年期の理解
- 第 15 回 授業のまとめ

[3] 評価の方法

試験期間中に試験は実施せず、レポート等を課す。
配点はレポート 2 回各 25 点、発表 25 点、心理テスト報告 25 点です。
欠席、遅刻・早退および授業の進行の妨げになる行為については減点します。

[4] 教 材

白井利明・都筑 学・森 陽子『やさしい青年心理学』（有斐閣 2002）

[5] 参考図書

- 南 博文編『老いることの意味ー中年・老年期』講座 生涯発達心理学 5(金子書房 1995)
- 藤村邦博・大久保純一郎・箱井英寿編『青年期以降の発達心理学』（北大路書房 2000）
- 子安増生他編『キーワードコレクション 発達心理学 改訂版』（新曜社 2004）
- 白井利明編『よくわかる青年心理学』（ミネルヴァ書房 2006）
- 溝上慎一『現代青年期の心理学』（有斐閣 2010）

[6] その他

心理テストは約 10 種、発表は 1 人 1 回行います。

音楽療法実習Ⅱ		担当教員	のじり えみこ 野尻 恵美子
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
実習	2単位	1年次通年	選択

[1] 授業のねらい

2年間で学んだ知識を生かし、障害児、高齢者の対象別に実際にセッションを行う。

高齢者に対しては、施設での集団セッションが中心となるが、障害児に対しては、学内、また学外においての個人セッション、集団セッションなど様々なケースを担当し実践の幅を広げる。

また、実践した内容について、指導者から定期的にスーパービジョンを受け、メインセラピストとして必要な知識、理論についての学習や実践を深め、最終的には、それらの実践内容、成果を論文にまとめ、学内及び学外での講習会、勉強会において発表する。

[2] 授業の計画

授業の内容は下記のとおり。

2年間を通してメインセラピストとして担当する障害児、高齢者の対象を決める。その上で

- ① 施設などのスタッフや保護者との交流
- ② 対象者との出会い
- ③ アセスメント（診断）を行う
- ④ 治療計画を立て、長期目標、短期目標を立てる
- ⑤ 実際にセッションを行う
- ⑥ セッション後のフィードバックおよび評価を行う
- ⑦ 定期的にスーパービジョンを受ける

以上の内容を担当したそれぞれの対象児（者）別に行う。

障害児については、障害の異なる対象児を複数担当し、治療を行うにあたりそれぞれの障害についての学習もセッションを行う前段階として含まれる。また個人セッション、集団セッションの両方を担当するにあたり治療構造論、集団力動などについての学習も深め、様々な形式の音楽療法を実践できるよう、臨床の場を多く経験する。

[3] 評価の方法

試験期間中に試験は実施しない。

実習への参加状況、取り組み方、セッション内容などを総合的に評価する。

[4] 教 材

必要に応じてプリントを配布する。

[5] 参考図書

随時紹介する。

[6] その他

施設や保護者と相談の上、学生が自主的にセッションすることも可能。